たかがキス、されどキス。
BBB unofficial fanbook
Steven×Zapp
♡いろいろえっちなスティーブン＆ザップ詰め合わせ本♡
モブザプ描写約15ページ程度
チェインも一緒の描写約20ページ程度
爆乳女体化ザップさん+チェインの描写約15ページ程度
FOR ADULT
DOUJIN
R18

たすけてキス、されてキス。
BBB unofficial fanbook
Steven×Zapp
○いろいろえっちなスティーブン＆ザップ詰め合わせ本○
モブザプ描写約15ページ程度
チェインも一緒の描写約20ページ程度
爆乳女体化ザップさん+チェインの描写約15ページ程度
FOR ADULT
DOUJIN
R18

たかがキス、されどキス。

みたいわ南国

この本は、個人製作、非公式のファンブックです。
原作者様・出版社様とは一切関係ありません。
二次創作をご存じない一般の方や、
関係者様の目に触れぬようご配慮をお願いします。
また、十八歳未満の方の閲覧は固くお断り致します。

たかがキス、されどキス。

――失敗した、と、そう思った。

まさか、という衝撃と、ウソだろ、という疑心と、そうして生ぬるくて分厚い舌によってぶち込まれるあからさまな性感とで、酔った頭がさらにぐちゃぐちゃになる。

なんでこうなっちゃったんだっけ？なんて問いに対する答えを自分が持ち合わせていないだろうことは、これまでの経験上よく分かっていた。

いつもそうなのだ。夜の街で酔っぱらっては前後不覚になり、手近な女を口説いて抱いて、見知らぬ部屋で朝を迎える。

昨夜寝た女の名前も顔も見覚えがない、程度の話であればもう驚く必要すら感じないのがザップ・レンフロという男だと、自身が一番よく知っている。

だから、所属する組織の飲み会で、賑わう小洒落たバーの一角で、うっかり上司にキスされる羽目になった詳細はきっと、未来永劫思い出せないのだろう。

ただ、情報収集の一環で次々女をたらしこんでくる彼のやり口に日頃から興味があったから、いったいどうやって引っ掛けてんスか、などと酒の勢いで聞いてしまったような気はする。

単にナンパの勝率を上げたかっただけだし、まあ彼の外見があまりにも伊達男そのものであるがゆえに聞いたところで活かせないのは百も承知だったのだが、聞いてみたいと一度思ってしまったらいつかは聞かずにいられないのがザップだった。

それに彼はなんと答えたのだろう。

ふうん、とか、もしかしたら、無言でにやりと意地悪く笑っていたのかもしれない。

ともかくそこで、キスが上手いからじゃないか、みたいなことを言われたような気がする。んなバカな、とザップは思わず返してしまって、じゃあ試してみるかい、と返事があった、ような、気がして。

それで、今だ。

「――ンっ、ん……！♡」

薄暗いバーのざわめきが遠ざかる。

食器が鳴る音の代わりに、クチュ、クチュ、と、唾液の絡まり合う音が聞こえる。

部屋の片隅に置かれたローソファでザップとスティーブンがキスをしているだなんて、誰も思ってはいないらしい。それはそうだろう。当人であるザップだって信じられないのだから。

「……っはぁ……！♡」

それでも身震いするくらいの刺激はひっきりなしに与えられているので、これが夢とか勘違いではないんだろうな、ということだけはいやというほど思い知らされていた。

暗がりに乗じて覆いかぶさられ、情熱的に唇を弄ばれてしまっている。

よもやこんなことになるとは思っていなかったので、ザップの右手は酒の入ったグラスを持ったままだった。逆の手はスティーブンが身体で押さえつけていて、後ずさりだってできやしない。

「……ふ、ぅ、う……っ！♡」

そしてなにが一番腹立たしいかって、そりゃあもうご自分で宣言していた通り、やたらめったら彼のキスがうまいということだった。

ザップだって遊び慣れてはいる。当たり前だがキスもする。

けれど、そんなのとは比較にならない、まるで別次元の技巧がそこにあった。

（喰われちゃう……っ♡）

女のそれとは少々つくりの異なった大きな唇が襲いかかって来て、ザップの舌を追いかけまわす。

じゅう、と吸って、柔く噛んで、解放してくれたと思ったらまた追いかけてきて、上から唾液を注がれてしまう。

「……っひ、ぁ……！♡」

こんなのは違う。こんなのはキスじゃない。

ザップが知っているのは主導権がこちらにあるキスで、こんな、なにもかも奪われるような、肉欲を突きつけられるような、組み伏せられるような荒々しいものではなかったはずなのだ。

「〜〜〜〜〜〜ンん……♡」

顔を背けようとしても全然許してもらえず、お仕置きだと言わんばかりに下唇に歯を立てられる。

そんな具合で躾の鞭を入れられるみたいに応じることを強要されて、蹂躙されて略奪されて、やっと彼が離れてくれた頃には、ザップはすっかりできあがってしまっていた。

「……っは……？♡　はぁ、あ、ぁ、あ……♡」

身体が熱い。特に、下腹が熱い。

とっさに血を操ってごまかしたが、なにもしなければ完全に勃起してしまっていた。くたあ、と壁にもたれてどうにかやりすごしているものの、明らかに息が上がっている。

「――どうだった？」

そう囁いてくる上司の声で、いっぺんに正気に返った。

職場の飲み会。

仕事はできるが鬼みたいに怖い上司、年上の同性に、悪ふざけでキスされて。

ここで遊び人を自負するチンピラ的な部下がとるべきリアクションは、リアクションは――。

「っ、ま、まァ、そっすね、こんなモンじゃないんすかァ？　な～んか自信たっぷりにしてましたけどっ！　俺だってこんくらいっ、ハハ、まあ俺は女にしかしてやりませんけどねっ⁉」

茶化すしか、ないだろ。

ところどころ声を裏返らせながらの迷演技は、とりあえず及第点ではあったらしい。それは残念、と上司は言って、普段となにひとつ変わらない調子で全然違う雑談を振ってきた。

ザップはしどろもどろになりながら変なテンションでそれに応じて、とんでもない出来事があった夜をなんとか乗り越えてみせたのである。

＊＊＊＊

「あーーーー……」

一週間経っても、ザップはそのアクシデントをまだ引きずってしまっていた。

というか、引きずらずにいられるわけがない。

あまりに衝撃的すぎたせいか、ザップはちょくちょく、くだんの上司に口づけられる夢を見てしまっていた。

どこか見知らぬベッドの上、彼の顔がどんどん近づいてきて、なにをされるか分かっているのに逃げられない。別に拘束されているわけじゃなくて、ただただ身体が言うことをきかないのだ。腕っぷしには自信があるのに、いとも簡単に押し倒されてしまう。

『ちょ……っ！　スターフェイズさん！　スターフェイズさん……！　おか、おかしいですってこんなの、なんで、なんで

あんた、俺に……！』

キスするんですか、と、みなまで音にすることもできない。

まるで生娘みたいに頬を赤くして震えて、ひたすら彼の、俳優でもやったらいいのにと思えるぐらい整っている顔を見つめてしまう。

『スター、……んぐ……っ♡』

スティーブンはなにも言わずに緩く微笑んで、ザップに唇を重ねてくる。ザップに対してはだいたい指示か罵倒しかしてこない彼に夢の中とはいえそんなことをさせてしまって、そこで胸が痛まないほどザップだって鬼畜ではない。

ただどうにも、罪悪感を抱けるのはほんの一瞬だけの間で、あとはひたすら彼の手管に溺れてしまうのだった。

『んっ、あ……！♡』

こうして夢で何度も反芻したものだから、期待だけでもペニスが硬くなる。彼に食られることに、悦びさえ抱いてしまう。

ねっとりと口蓋を嬲る舌に性感を刺激され、はあ、と熱い吐息が零れる。

ご都合主義の夢の中では、愛撫を連想しただけで、やすやすと妄想が広がってしまった。

『ザップ』

『ひ……！♡』

とびきり甘い声で、とびきり悪い表情で、スティーブンの手がザップをまさぐる。

はじめは服越しに、けれどすぐに大胆になって、脇腹の、敏感な箇所をすう、となぞってくる。

『あ、ぁ……！♡』

『美味しそうだ』

断じて、男色の趣味はない。

そんな嗜好はない、はずだ。

なにせザップ・レンフロといったら無類の女好きで通っているのであって、ケータイには愛人の連絡先がずらり並んでいるわけだし、女の柔らかさも、胎の中の温かさも、二日と切らしたくはないと、そう考えているわけで。

『食べちゃっていいかなあ』

『〜〜〜〜〜〜〜〜……っ！♡』

なのに、もう、すべて確信が持てなくなってしまっていた。

今しがたあまりにも危険な発言をした男、ただネクタイを解くさまさえ絵になってしまうスティーブンから、一ミリだって目が離せない。

ぞくぞくぞくと背筋を走るのは明らかな快感で、その証に、ザップの性器はしっかり勃ち上がってしまっていた。

『ねえ、ザップ』

色気のある顔立ちがいけない。ザップよりも一回り大きい鍛えられた身体がいけない。鼓膜を犯すみたいな声も、悪だくみ

をしている風な表情も、なにもかもがいけない。そうしてそのいけないなかでも、特に際立ってよくないことといえば。

『シようよ』

『ふぇ……！♡』

ザップを雌扱いする、その態度がいっとう凶悪だった。

スティーブンは男で、ザップも男で、だからこそそんなことあってはならないのに、性的な視線を向けられるだけで全身にぶわりと鳥肌が立つ。

どうされちゃうんだろう、なんて受け身の発想に無意識に囚われて、身動きが取れなくなってしまう。

夜の帝王だのと吹聴するくらいのヤリチン男の矜持を叩き割る勢いで迫られると、気がどうかしそうなくらいに興奮した。

素肌に触れられるだけでちりりと脳内に火花が散り、よく知っているはずのセックスが、完全に未知なものへと変貌する。

『ヤらせて』

『〜〜〜〜……ッ！♡』

これ以上ないくらい露骨に求められて口づけられれば、たちまちザップは上りつめた。スティーブンの大きな手に股間を押さえられ、服越しに欲望を叩きつける――、そんな悪趣味な夢の産物が今、精液まみれのパンツとなってザップの目の前に存在している。

朝の日差しを受ける安っぽいベッドで、思わず頭を抱えたくだってなる。

なにが悲しくて、うっかりキスされた上司を相手に夢精だなんて、子供じみた真似をしなければならないのか。

「……着替えるか……」

のろのろと起き上がり、腹立ちまぎれに汚れた下着を床へと放る。パンツ一丁で寝ていたので全裸になってしまったが、ちょうどいいとばかりにそのままシャワーを浴びることにした。

こんな茹だった頭で彼に会うわけにはいかないと、直感的にそう思ったからだった。

＊＊＊＊＊

そのうちどうにかなるさ、と、惰性で過ごしていた傷心のザップに、一切の容赦もなく残酷な現実が襲いかかっていた。

「ちょっとザップ〜、だいじょうぶ〜？」

「うるっせー！　ほっといてくれ……っ！」

ベッドから身を乗り出している半裸の女性を振り切って、慌ただしく服を着る。

その後数日経っても例の夢は相変わらず続き、それどころか、いよいよザップは勃起できなくなっていた。

自慰はできるので、正確には、女性に対して勃起できなくなったということだ。なんとなく勃ちはするが、いざ挿入ともなるとくにゃんと曲がってしまうような、なんとも頼りない硬さになってしまった。

「ね～、別に気にしなくったっていいったら！　聞いてるのぉ～、ザップ！」

「チックショー！」

大声で叫んで、女の部屋をひとり飛び出す。

毎夜違う女の股に通ってんだと豪語してきたザップにとって、こんなことは初めての経験だった。

馴染みのある興奮はやってくるのに、これじゃないと感じてしまう。心の奥底ではもっと、別の快楽を望んでしまっている。

『シようよ』

「ぁ……♡！」

夢の中で散々言わせた台詞を思い出せば、ぞくんと腹がうずいた。

あまりの気持ち良さに、ザップは思わず唇を噛む。

分かっている。

彼がそんなこと言うわけがない。

ただ酔った勢いでふざけてキスしたというだけで、自意識過剰も甚だしい。

『ヤらせて』

「ひぅ……！♡」

そして自分が男に目覚めたのでもない、という風には思う。

まさかなと考え、スマートフォンでイケメン俳優の画像検索をしたりしてみたのだが、別になんともならなかった。

ただスティーブンに対してだけ、となると、それはそれで別の意味でマズい。あまりにも恐ろしかったので、その先は敢えて考えないようにした。

「さっむ……」

夜風が身に染みる。

実際寒くもあるし、それ以上に、深夜にひとりきりでいるのがザップはどうにも苦手だった。

女の元をふらふらしている理由も半分くらいはそのせいな

のだろうが、今晩ばかりはどの愛人のところにだって行きたくない。
けれどあの、家具といったら安いベッドぐらいしかなくてがらんとした自分の部屋にも帰りたくなかった。
人恋しい。誰か、誰か――。

「ちぇ……！」

ふと浮かんだのがレオナルドの顔だったことに、ザップは軽く舌を打つ。
不能となってしまった今、やれ童貞だの陰毛だのとからかってきた後輩に見せる顔なんてなかった。
女もダメ。レオナルドもダメ。自宅もダメ。それでも人の存在を感じられる場所ということになると、ザップの心当たりなんてもう一か所しかない。
誰もいない事務所に戻り、定位置のソファにごろりと横になる。それでどうにか一晩過ごそうと考えたのが、今夜のザップの敗因だった。

＊＊＊＊＊

「……ん？　誰かいるのか？」

ウッソだろマジでなんで夜中に一人で事務所に来てんのこのワーカホリック!?などと心の中だけで毒づいても、もう遅い。
真っ暗な部屋でザップがうとうと眠りかけたころ唐突に執務室の明かりがつき、スティーブンの声がした。
たまたま女が捕まらなかったり飲み過ぎて動けなかったりしたときに、ザップが事務所で寝泊まりするのはさして珍しいことではない。
だから、「ああ、スターフェイズさん。お疲れ様っす」と、いつも通りに挨拶をすればよかったのだ。
そうすればよかったのになぜか身じろぎもできなくて、スティーブンに背を向けたまま狸寝入りをすることになってしまった。
あまりの気まずさに、どことなく呼吸もぎこちない。
「……なんだ、お前か」
呆れた風な、けれど優しい声が上から降ってくる。
ザップはますます動けなくなってしまい、必死に寝たふりを続行した。

「おい、起きろ。せめて仮眠室使え。風邪ひくぞ」
心臓が爆音で鳴っているのが彼に聞こえやしないか、と、どうしたってビクついてしまう。
早く立ち去ってくれと願うのに、スティーブンの声が急に近くなった。
「ザップ」
（ヒッ）
犬猫にでもするみたいに頭を撫でられて、思わず身体が緊張してしまう。狸寝入りがバレてもおかしくないだろうに、スティーブンからそういう反応は帰って来なかった。
「起きろって」
（ヒェエエエエエエーーーー〜〜〜……！）
優しい声が、なんだか怖い。気に入らないことがあればすぐ春風するような人間にそんな声を出されると、なにやら悪い意図でもありそうで怖い。
そうしてザップの勘は、ある意味で的中していたのだった。
「あんまり起きないと、またキスするぞ」
——今なんて？
聞き返したのは脳内のザップで、それを実際行動に移す勇気はなかった。とにかく悪い予感しかしなくて、ただただこの瞬間を乗り切りたいと全力でなにかに祈る。
「……お前のせいだからな」
なんなんだそれは。なんで全部俺が悪いんだ。
この状況で鬼上司にそうはっきり言えるようなキャラなら、たぶん酔った勢いでキスなんかされていない。
ぐっと肩を掴まれて、無理やりスティーブンの方を向かされる。
俺はなにも気づいていません！と主張したいだけの強張った寝顔は、本人の努力も空しく、瞼にピクピクと力が入ってしまっていた。
「……お前の、せいだからな」
（あ——）
二度目の責任転嫁には、脳内でツッコミを入れる暇すらなかった。
ふにりと唇に、温かなものが触れている。
角度をつけて食まれ、閉じた境目をねっとり舐めて促されたなら、自然と身体が動いてしまっていた。
ザップの唇が開き、スティーブンの舌を受け入れる。
（あ、また、喰われちゃう、喰われちゃう——）
ぬめる粘膜をねじ込まれて舌先を吸われると、一気にぶわっ

と鳥肌が立った。
　あんな涼しげな顔をしておいて氷を扱う血法遣いでいて、口づけはびっくりするぐらい荒っぽく、まるでマウンティングでもされているかのようだ。
（なにこれ、なんだこれ……！）
「ん、ふ……っ♡」
　大きな掌がザップの身体をまさぐる。体格差そのままに、ぐっと体重をかけてのしかかってくる。
　こんなのは知らない。知らないというか、知っているというか、やってはいるけどやられたことはない。こんなのはまるで愛撫だと、いい具合に雌を仕込んでおいしく頂いてしまうための手段だと、そんな風に感じてしまえば頭の奥が熱く痺れた。
「はぁあ……っ♡」
　馬鹿みたいに気持ちよくしてくれる唇が何度も何度も降ってきて、ザップのそこを未知の快楽で犯す。そうやって餌をぶら下げられると反射的に、その先への単純な欲求で、無意識に腕が動いていた。
　さっきまで、いや今も、睡眠中ですすみませんというていで瞼を閉じているくせに。恋人同士がするみたいに、スティーブンの首へと手を回してしまう。
「……っ！」
「ぁ、ん……っ♡　ふ……っ♡」
　そうなればもう、互いを貪るようにキスが深まるだけだった。
　くちゅ、くちゅと濡れた音を立て、舌を絡めて、唾液を啜る。触れ合う吐息にまで官能を呼び起こされてしまい、ザップは鼻を鳴らして小さく喘いでいた。
「……いいの？」
「え……？　あ、？　ちょっと、ちょっとスターフェイズさん……っ!?　わぁっ！」
　問いかけるような調子ではあったが、スティーブンは返事なんて聞かずに、ザップを姫抱きにして仮眠室へ連れ込んでいた。
　ベッドに放り投げられて、ザップは改めて質問の意図を噛みしめる。
　すなわち、抱いてもいいか、という意味だ。
「待……!?　っあ、あ、あの、あのっ、ちょっとなんか急すぎやしませんかね!?　待って!?　あんた酔ってます!?　相手俺ですよ！　いい情報持ってそうな女とかじゃないですよ!?」
「急なのは分かってる、僕は酔ってない、相手はお前で間違いない。いいから少し黙ってろ！」
「ん……っ！♡」
　据わった目をしたスティーブンに押し倒されて、ザップはまたも口づけられる。

「さっきみたいにしてくれ」
「は？」
「腕」
「う、腕……？」
「早く」
「いや、早くったってあんた、そんな……！」
ぎろりと睨まれて、ザップは思わず身を竦める。
渋々従ったなら、またキスの嵐だ。
（な、なんか、もう……っ!? ♡）
ベッドの上で抱き合って、口づけて、これじゃあまるっきりいい雰囲気のカップルそのままになってしまう。
絶対違うと分かっているのに、スティーブンを止められない。
圧倒的な現実感を叩きつけてくる快感の渦のなかで、ザップは薄目を開けてそぐそこの男を見る。なぜだか湧き出した生理的な涙で、視界がぐにゃりと滲んだ。
「っちょ、なにするんすか……♡」
「何って」
はあはあ荒い息の合間に、ザップが問う。
「気持ちいいことさ」
「んん……！♡」
質問の答えにはなっていない。
ハイネックの裾をめくられて、素肌に触れられたからザップが咎めたのだ。
けれどスティーブンはけむに巻くように返して、狼藉を働く手を止めない。
「……気持ちいいの、好きだろう？」
「……そ、そりゃ、そうですけどちょっと待……っ！♡　んんんっ！♡」
こり、と乳首を引っかかれ、ザップの声も、身体も跳ねる。
なにかの間違いであればよかったのにどうもスティーブンはそこを狙っていたらしく、二度、三度と摘まみ上げられてしまう。
「スタ、や、んなとこやめてくださいよぉおお……っ！♡」
「どうして」
「どうしてって……！♡　お、俺、男ですし……！♡　そこ、カンケーない、っしょ……!? ♡　ん、あンっ！♡」
喘ぐみたいな悲鳴が出てしまって、ザップは思わず自分の手で口を塞いだ。
ばかにされるのでは、と怯えつつ見上げたかの男はなぜか、ちょっと表情を険しくしてこちらを静かに見下ろしている。
「……お前、ちょっと感度良すぎやしないか。まさかしょっちゅうこういうことしてるのか？」
「んなわけないでしょ！♡」
この言われようにはさすがのザップも憤慨した。

そんなわけがない。

質問の真意が「女に乳首を触らせているのか？」なのか、「普段から男と寝ているのか？」なのか判然としなかったが、いずれにしろザップの答えはノーだった。

というか、れっきとしたオスである自分にとって、そんな質問自体がどうしようもなく失礼だと思った。

ついカッとして、衝動のままに口を開く。

「マジでふざけんなよっ、そんなわけないでしょう！♡　こん、こんなこと、あんたにされんのが初めてで……っ！♡」

そこまで声に出してしまってから、はっとする。

己の台詞が、まるで「私は生娘です」とわざわざ宣言しているように聞こえてしまうことに気づいたからだ。

「……そう」

「ひっ♡」

案の定、視線を上げた先のスティーブンは、雄の凄みを増してしまっていた。

ぎらついた瞳に捉えられて身を竦ませたところで、また深く唇を奪われる。それだけでも溺れそうになってしまうのに、つんと尖った乳首までをも指先で刺激されてしまう。

ザップの股間にはスティーブンの股間が重なってきて、スラックスの奥にある張りつめたペニスを、ごりごりごりと押しつけてきていた。

「んっんっんっんっんんんん～～～～～……っ!?♡」

完全に、キャパシティ越えだ。

勘と本能だけで生き抜いてきただけに、考え事には不向きなたちだ。もともと容量の少ない方なのだ。

このひと俺で勃起してる!?♡という驚きだけでも頭が破裂しそうだし、乳首を延々こねられているせいで未知の感覚に飲まれそうだし。それにやっぱりキスが、あの冷血上司に施されている情熱的なキスが、やはりどうしようもなく気持ちが良くて。

「ザップ、」

「あ、だめだっ、声♡　あんたの声っ、こ、腰にクるんすよおおおおお……っ！♡　これ以上はほんとにマズ……っ！♡」

「ザップ……！♡」

「～～～～～～～～～～～～～～～～っ！♡」

素でも色気のあるスティーブンの声は、切羽詰まった響きが入るとそこらのポルノよりもよっぽどグッとくるものがあった。

口づけの合間に、耳元で、直接。名前を呼ばれてしまっただけで、目の前が白くスパークする。ぞ、と湧き上がる快感に、抗うことなんてできやしない。

「あ、ンんんんんんんんーーーーー～～～～……っ！♡」

歯を食いしばる。身体を強張らせる。

それらはすべて強烈な悦を逃がすための反応で、つまるところザップは射精してしまっていた。
絶頂なんて女の胎のなかでするものだと思っていた価値観が、いっぺんにひっくり返される。追い詰められ、追い込まれての吐精はまったく別次元の、恐ろしいまでの悦さだった。
「っは、……♡　はぁ、は……♡　んっ！♡」
「……いっぱい出たね……♡」
スティーブンが身を起こし、ザップのボトムの股の部分に手で触れる。
じとり、と濡れた感触がして、相手にもこれが伝わっているはずだと思うと褐色の頬が熱を持った。
「さ、わんないで、くだ、さ……！♡　ひぅ♡」
「ほら、こんなに……♡」
服越しに陰茎を掴まれ、上下に擦られるとにちゅ♡ぬっちゅ♡と水音が立つ。
「あぅ、やめ……！♡　っあ、あーーーーーーーー……っ！♡」
「気持ち良かったかい……♡」
女の華奢な手とは違う、武骨な、男らしい大きな手だ。
急所を握られて感じる恐怖は常のそれとは異なっていて、そこを使い物にならなくされたらどうしよう、というよりは、これ以上よがらされてしまっては困る、という意味合いだった。
「はふ、あう、スタ……、あぅ、あ……っ♡」
「ザップ……！♡」
逃げるべきだと思うのに、全然身体が動かない。
どうしようもない快楽に全身が痺れ、はあはあと息を乱すくらいしかできない。
「ん……あっ!?♡」
「ああ、……すご……♡」
そうこうしているうちに悪戯は度を越え、スティーブンがまさかの行動に出ていた。
無断でザップのボトムを寛げて、露出した下着の膨らみをうっとりと眺めていたのだ。じっとり精液の染み込んだそこに軽くキスをしたと思えば、そのまま。
「ちょっとおぉおおおおおおおお……っ!?♡」
「は、ふ……♡」
目の前で起きている出来事が、どうにもザップには信じられそうにない。
甘いマスクの伊達男が、デキるけどキツい年上の上司が、ザップのペニスを下着から取り出してぱくんと銜え込んでいた。
ちゅっちゅ、ちゅっちゅとカリ裏を舐める仕草は女相手ではよく見たものだけれど、こんな展開は一切予想していない。
「ス……っ！♡　あぁ、あぁああっ、ちょっとやめてっ、やばいやばいやばいっ！♡　これはやばいっ！♡　出ちまう、待って待ってっ、ホントに出ちまうからスト……ッ！♡　ひっ、

「〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜……っ！♡」
「ん、……♡」
　卑猥な舌使いで奉仕されて、もごもごと頬を膨らませているフェラ顔のスティーブンと目が合ってしまったならすぐに限界が訪れた。
「だからやめろって言ったのに……っ！♡　っう、う……！♡　んぁ、きもち……っ♡」
「んむ、っふ……♡　ふ、……♡」
　さらに驚くべきことに、咥内で射ち出されたザップの精液を、スティーブンはこくこくと飲み下していた。
「ウ、ソ、だろぉおおお……っ!?♡」
「ん……♡」
　一滴も残すまいとペニスに吸いつき、尿道口を何度も舌でほじくる。商売女のような手管に目眩さえ覚えながら、ザップは知らず、かくかく腰を振っていた。
「な、んで、こんなこと……♡」
「んーー……？♡」
　ちゅぽんっ♡、と肉棒から唇を離し、スティーブンが低く応える。伏せられていた双眸が、潤んだザップの瞳を捉えた。
「そんなの、シたいからに決まってるだろ」
「ひぇ……っ！♡」
　さっきまで口でイイ思いをさせてくれていたくせに、スティーブンのまなざしは、いかにも雄らしい迫力を持っていた。取って喰うぞと脅すような視線に怯んだ隙を狙って、スティーブンがまたザップのペニスを銜えだす。
　しかし今度は、邪魔なボトムや下着をずり下げ、涎を掬ってぬらついた指で、ザップの肛門を執拗に撫でていた。
「い……っ!?♡　ん、な、ケツ……!?♡　ちょっと待った、ちょっと待……っ！♡　へあぁぁああああああ……っ♡」
「あー思ったより……♡　うん、柔らかい、柔らかい……♡　すごいなザップ、やっぱり才能あるよお前……♡」
「なんの才能ですかぁぁああああ……っ！♡　ん、ンっ！♡」
　返事代わりのつもりなのか、ザップに侵入したスティーブンの指が、アナルの内壁を刺激している。
　フェラチオと同時進行でそうされているので、どちらが気持ちいいんだか、ザップの認識にバグが起き始めていた。
　どうしようもなくて、すがるものが欲しくて、なぜだかすぐそこにあったスティーブンの頭に抱きついてしまう。
「も……！♡　やめ、それ、変ですってぇ……！♡　ちんちんだけでいいですっ、尻はやだ、やだあ……！♡」
「まあそう言うなよ♡」
　ちゅぽ♡ちゅぽ♡というリップノイズに混じり、くちっ♡

くちゅ♡くちゅん♡と水音が立つ。

その長い指でザップの尻穴を調べ尽くしたスティーブンは早々に弱点を見つけると、そこばかりを何度も圧迫した。見事に前立腺を探り当てられてしまったザップは底の知れない快感に抗いきれず、スティーブンの頭を力いっぱい抱きしめている。

「……っひい……！♡　あぁ、いやだ、いや、こんなイキ方やだぁああああああ……っ！♡　イかされちゃうっ！♡　尻で、尻なんかでえぇえええ……っ♡　もぉやだあ、あぅ、んんんんんんーーーーーーーー～～～～～……っ！♡」

なにが悲しくて、めちゃくちゃやってくる相手に縋りつきながら極まらなくてはならないのか。

そんな気持ちを押し潰すまでに、圧倒的な快楽が勝った。

ザップは身体を丸め、再びスティーブンの口の中に絶頂の証を注ぎ込む。尻に入った他人の指をぎゅうぎゅうぎゅうぎゅう締めつけつつ精液を放てば、下腹から湧き上がる悦で脳味噌まで茹で上がるような心地がした。

「……はぁっ、はあ、ああ、はぁ……♡」

下手に抵抗してしまった分、余韻だけでもくらくらするぐらいに深くイかされていた。

くったりとベッドに倒れ込んだザップは、どこか遠くに飛びかけている意識の片隅で、聞き馴染んだピリリ、という音を聞く。

避妊具の封を切る音だと常ならすぐに気が付いたはずだが、今回ばかりはそううまくもいかなかった。

「ふぇっ!?♡」

だから突然尻肉の間にとん♡、と亀頭を押し当てられ、間抜けな声だって出るというものだ。

「待……っ!?♡　えぇっ!?♡　えっ!?♡」

「お前のここに、僕のを……♡」

「いや入りませんって！♡　入りませんって、なんですかこのデカブツ！♡」

尻に当たったモノの大きさに違和感を覚えたザップががばりと身を起こすと、なるほど、スラックスの前を緩めたスティーブンの股の間に凶悪なサイズの勃起ペニスが生えているのが目に入った。

一気に血の気が引いて、ザップはぶんぶんと顔を横に振る。

「入るよ。小柄な女性にだって入るんだから、お前なら大丈夫だろ」

「や、でも……！♡　ケ、ケツが切れちゃいますって……！♡　んなでっかいの、むり、絶対むり……っ！♡」

「ザーーップ……」

あんまりびっくりしたものだから、その凶器が尻に入るのか入らないのかという点に話題が集中してしまっていた。そもそ

も合意かどうか怪しい状態で身体を犯されようとしているのに、論点からそこがすっぽりと抜け落ちてしまっている。
「……気持ち良くするよ。責任持って、お前のこと気持ち良くしてあげる。気持ちいいの好きなんだろう？　ね？　だからさ、お前の初めて、僕にちょうだい」
「そ、んなのウソ、ウソです、やだ、やだ……♡」
「大体最初は皆そういう反応するんだよ。でもね、……」
「っひ……！♡」
スティーブンがザップの耳元に唇を押し当てる。
「結局、泣くほど善がるんだ」と、吐息たっぷりに囁いたのは、もちろんわざとだ。己の声が良いのを知っていて、それを武器として使ったのだ。
「だって、こわ、こわい、……♡」
「うん、そうだね。……優しくするからさ……」
「ふぇぇぇぇぇ、え……っ♡」
情報奪取のためここぞというタイミングで使われてきた声色はザップにも効果てきめんで、急激に勢いが削がれていく。
チャンスをきっちりモノにするべく、スティーブンはちゅっちゅとザップの耳をついばみながら、自身を挿入していった。
「ん、ん、んーーーーーーーーーーーーーー〜〜〜〜……っ！♡」
「っは、キツ……♡　ねえ、大きい方出すときみたいにしてみて？♡　そんで俺のこと、受け入れて……っ♡」
「ふぁう、んあ……っ♡」
ずっと焦がれていた身体をようやく手に入れられるのだと思えば、つい素の自分称が出る。
未知の恐怖に怯えつつも瞳を蕩かせ指示に従う、そんな思い人の姿を間近に見たならよりいっそう気が昂った。
「あ、ぁ……っ！♡」
「ザップ、ザップ……！♡」
ず、ず、ず、ず……！とゆっくり腰を進め、欲望を彼に埋めていく。
時間はかかっても着実に事態は進行し、やがてスティーブンの下腹が、ザップの尻にぴたりと密着した。
「ほら、全部入ったよ……♡」
「ひは、ぁ、ウソおぉ……っ♡」
信じられない、という顔で、ザップが首だけ起こして繋がった箇所を見やる。
現実を目の当たりにした彼はぽすんとベッドにまた頭を預けたのに、その陰茎は見事にいきり立ったままだった。
大した素質だ、と口笛でも吹きたい気分だったがこの場にはそぐわない。
からかう代わりにキスを落として、ゆすゆすと緩く揺さぶってやる。
「分かるか？♡　ほらね、お前の中に、俺が……♡　セック

スしてるんだよ、僕ら♡　ぴったりくっついて、奥までハメて……、さ？♡」

「ふあぁああっ！♡　そこぉっ、そこやらあぁああ……っ！♡　ちんぽ当てちゃや、んっ！♡　ンんん……っ！♡」

痛みを与えないように、怖がらせないように優しく犯すていでいて、スティーブンはザップの反応を、逐一記憶し分析していた。

弱い部分を擦られたときに首を反らせる仕草も、スティーブンの声に対してきゅん♡と締まってみせる内壁の動きも。

どうしてやったときに一番悦さそうにしていたかしばらくの間確かめて、それからスティーブンは、ザップの鼓膜に狙いを定めた。

「……お前はね……♡　ザップはね、俺に犯されちゃってんだよ♡　自称女好きのザップ・レンフロは、スティーブン・A・スターフェイズに、奥までずっぽり……♡　ちんぽハメられちゃってんの♡」

「〜〜〜〜っひ、ぁ……！♡　やだやだそんなん……っ！♡　そんなっ、そんな風に言われちゃったらやだあぁああああああーーーーーーーー〜〜〜〜〜〜〜〜……っ！♡」

囁きと同時に前立腺の付近をごりりと圧してやったなら、まさに読み通りでザップは哀れに悲鳴を上げ、あっけなく達してしまっていた。

好きでもない相手に散々ハニートラップをかけてきた身だけにこのぐらいの私的利用は許して欲しい、と、スティーブンは舌なめずりしながら、絶頂するザップを見下ろしている。

「……はは♡　何お前、こういうのが好きだったの……？♡」

「あぅ、ああ、いっぱい出、る……っ！♡　さっきイったばっかなの、にっ！♡　ふあぁ、ああぁ、ああぁあああああーーーーーーーーーーーーーー〜〜〜〜〜〜……っ♡」

恥ずかしそうに腕で顔を隠しているザップは必死すぎて、からかう台詞にも気づけないでいるらしい。

耳まで真っ赤にしたザップが精液を吐ききった頃合いを見計らい、スティーブンは改めて、彼に意地悪く声をかけた。

「どう？♡　気持ち良かった……？♡」

「……っは、はあ、は、ふはぁ、は……っ♡」

男がイく原理が分かっていないわけではない。

ただ単に、ザップをもっと追い詰めてやりたいだけだった。

まだ息も整わない彼をさあどうしてやろうかと、組織の参謀を担う男の優秀な頭脳があれこれ悪だくみをし始める。

「たくさん出たね♡　……でも、僕はまだだからさぁ……っ！♡」

「ひ⁉♡　あ、ぁあああああああああああああああああああああ

あーーーーーーーーーーーーー〜〜〜〜ッ！♡」

　言って、スティーブンはザップの膝裏を掬い、体重をかけて鋭く犯しだした。

　先ほどまでの緩やかな責めから一転、いかにも雄っぽい荒々しい抽挿に、銀灰の瞳が急速に潤んでいく。

「おっ、ォおおおぉっ！♡　やらぁ激し……っ！♡　ほごおぉおおおっ！♡　おンっ！♡　おご……っ♡」

「っはーーーーーー……、気持ち……っ！♡」

　V字に脚を開かせて、足首をシーツに縫い留める。どういう体勢をさせられているのかすぐに察し、ザップは悩ましげに眉を寄せた。

「あっあっいやらっ♡　こんなのっ、おんなみたいじゃん……っ！♡　こんなカッコいやらのっ！♡　おんなっ、おんなみたいにされてイっちゃうのやだぁぁあああっ！♡　やだやだ違うっ、これやらあぁあああああああああ……っ！♡」

「あっははは……！♡」

　スティーブンは腕立てでもするような姿勢で、夢中になってザップに腰を振った。

　なにせ彼ときたら口ではいやだと言うくせに、しっかりペニスを反り返らせてしまっている。

　ビキビキに張り詰めた、淫水焼けした一物は、ピストンの衝撃で繰り返し本人の下腹を打っていた。溢れた我慢汁が、ぴゅる♡ぴゅ♡とふしだらに照明を反射しながらまき散らされる。

「うん、イイ格好でイこうな♡　初めてのアナルセックスで、恥ずかしい格好でハメられながらイっちゃおう♡　すっごくエッチだぞザップ♡　真上からどっちゅんどっちゅん♡ってちんぽ突っ込まれてるお前の格好♡　ポルノみたいで、すーーーーごくやらしいぃ……っ！♡」

「……っエッチだとか、言うなあぁあああっ！♡　ひあ、あ、だめだめだめっ！♡　また出るぅうっ！♡　イきたくないっ、こんなのでイきたくなんかないっ、のおぉおおおおおおおおおおおおおお……っ！♡　んんんんんんん〜〜〜〜〜っ！♡　ひうぅうあああああっ、イ……っ！♡　またイっ、くうぅうううううううううーーーーーーーーーー〜〜〜〜〜〜んんんんんん……っ！♡」

　わめく声に煽られるようにぐっぽん！♡ぐっぽん！♡と後孔を穿てば、ザップの舌が卑猥なニュアンスでこちらへ突き出されてくる。

　むやみに我慢した挙句思い切りイってしまって、あえなくザップは自身の精液を、その顔に浴びることになってしまった。

「おぉおおおっ、ほおぉおおおお……っ!?♡　んぷうぅううっ、顔、に……っ！♡　あぁあっ！♡　セルフ顔射っ、いやぁ、いやあぁああああああああ……っ！♡」

「あっは、いやらし♡　すーごいなこれ、器用だねお前……っ！♡」
褐色の肌が白濁で彩られていくさまは、スティーブンから見ればそれこそ絶景そのものだ。
ザップの額に、頬に、唇に、と、出しすぎて薄くなってしまった体液が、ぴるぴるぴるぴると乗っかっていく。
「ひぃ……っ♡　あぁあああ、あーーーーーー……っ♡」
「ふふ……♡」
極まりきってなかば意識を飛ばしかけているザップの、片足をスティーブンは解放する。
空いた手で、そっと彼の男性器を握り込んだ。
「なあ……♡　どうだった？♡　悦かったか？♡　女の子みたいにされちゃった気分♡　なあ、どうだった……♡」
「あぅう……っ！♡」
悪い風に囁けば、ザップが急にびくりと上半身を仰け反らせる。
「エッチだったなあ……♡　足開かされてひっくり返されちゃって♡　上からぐぽんっ！♡ぐぽんっ！♡って犯されちゃってるお前の姿……♡　そこらのポルノムービーなんかよりさ、よっぽどやばくてエロかった♡　だってさぁ……、♡」
「い、や……っ♡　言わないで、言わないでこれ以上っ、お願いいいぃいいいいぃ……っ！♡」
甘い甘い声色に引きずられるように、ザップの悲鳴が上ずっていく。
「毎晩違う女喰ってきたヤリチンのお前がさ♡　僕のペニスで、ケツ穴ずぽずぽ食い散らかされて……♡　すっかりおまんこ扱いされちゃってるんだもん♡　これがエロくなくて、なんだって言うんだよなあ……っ！♡」
「ひぅ、~~~~~~~~~~~~~~~~……っ！♡」
あまりの羞恥で言葉を失ってしまったザップの代わりに、スティーブンの手の中の、彼の男性器がびくびくっ♡と脈を打つ。
「……っあぁああ……っ！♡　やだ、やだ、スターフェイズさぁん……っ！♡」
「はっは♡　気持ち良さそうな顔しちゃって……♡　やっぱ正解か♡　お前あれだね、Mっ気あるね？♡　全く、こんなんでどうやって女口説いてきたんだかねえ……♡」
「…………っ！♡」
ザップは唇を引き結んでぶんぶんと首を振っているが、赤面しながらそんなリアクションをされてしまえば愛らしくって仕方がない。
スティーブンはにやついた顔のまま、再びザップの両足を抱

え上げた。
「いいこと教えてくれたからもう一回イかせてあげようね？♡」
「いいっ！♡　いらないですっ、もういい……っ！♡　もう一回なんていらないですからあぁあああっ！♡　あぅ、あう、あ……っ！♡」
勝手知ったる風で、スティーブンがザップの後孔を犯す。
ぬろろろろ……っ♡と竿を抜いて、ぱちゅんっ！♡と突き入れて、それを何度も繰り返すと、ザップはとうとう泣き出していた。
すっかり蕩けた銀の瞳からぽろぽろぽろぽろ涙を零し、両手で懸命に口を塞いで、ふーっ♡ふーっ♡と息をする。
「……気持ちいい？♡」
「……ッ！♡」
くっと強く前立腺の付近を擦られれば、ザップの首が反って喉仏が綺麗に浮き出る。
どの程度快感を得ているかなんてそそり立つペニスを見るだけで分かるだろうに、スティーブンはわざとザップに問うているのだ。
「ねえ、……おまんこ、気持ちいい……？♡」
「～～～～～～～～……っ！♡　！♡　！♡」
そこは女性器ではないし、もとより自分は女ではないと、なにか言い返してやりたくて、汗と涙でぐちゃぐちゃの顔でスティーブンを睨みつける。
会話の間にもザップを責める肉茎は手加減がなく、三度に一度は弱い部分を思いっきり先端で突いてくるのだ。
だから、一言でも発してしまえばすべてが決壊してしまいそうで、ザップはひたすらスティーブンを睨む。快楽に悶えながら、瞳を危うく揺らしながら、負けるものかと凄んでみせる。
そんな様子が一番雄を煽るのだと、知らないがゆえの反応だった。
「……ふふ……♡」
「あンっ！♡　……っぁ、……～～～～～～……っ！♡」
あまりにもうまそうな獲物を前に、どす黒い笑いだって漏れる。
足技を磨くため鍛え上げた下肢でもって肉穴を強く穿ってやって、あれほど努力して閉じていた唇を意志に反して開かせる。
食事であれば多少のマナーも必要だろうが、閨でのあれこれにお決まりの作法などただただ単純に無粋なだけだ。
したがってスティーブンは知りうる最適な方法で、獲物を仕上げてしまうことにした。
「僕はね、すっごく気持ちいいよ……♡　ザップの、……おまんこ……っ♡　僕のちんぽを銜え込んでるついさっきまで未

使用だった穴♡　とっても頑張って、僕のこと気持ち良くしようとしてくれてるんだもん♡　ほらきゅっきゅ、きゅっきゅってしまってさぁ♡　かぁーわいい……♡　可愛いまんこだ、ザップ……♡　太くて長くて硬いのが好きなんだな？♡　ぅんうん可愛い、お利口なおまんこだ♡　ザップ♡　お前のまんこ♡　可愛いよ……っ！♡」

「ん……っ！♡　んっ！♡　っひ、ひぅううっ、ひぃいい……っ！♡」

　卑猥な単語をわざわざ選んで直接耳に吹き込んでやったなら、ザップはぎゅうっと目を閉じて、唇を押さえる手に力をこめる。

　けれど視覚を抑えれば聴覚が研ぎ澄まされるだけであって、もうここに至ってはなにもかもが遅すぎた。

　俗語で揶揄してやるたびに、びくびくひくんと内壁が収縮しているのが分かる。

「怖がらないで……♡　お前を否定したりしないよ♡　気持ちいいんだろう？♡　おまんこがさぁ……♡　ね、ほら、認めちゃおう♡　そしたらもっと気持ちいいぞ♡　お前の好きなように犯してあげる……♡　だからさ、なあ、言ってみて？♡　お前のここ、なんて呼んだらいい？♡　さっきまで処女だったのにこぉんなにいやらしくって、男が好きで、後ろだけでめちゃくちゃ悦くなれちゃうエッチな穴……っ♡　ねえ、なんて呼んで欲しい？♡　答えてほら、怖くない、怖くないよーー……♡」

「あ、あ、ぁ、あ、あ、あ、あ、！♡　ひあぁぁあああああっ、あぁぁあああああああああああああああ……っ！♡」

　口元を覆う手に手を添えてそうっと下ろしてやりながら、スティーブンはザップの耳を舐める。端から焦らして、涎を塗りつけて、ザップがぶるりと震えたのを合図に耳穴へ舌を突っ込んだ。

　ぐぢゅ♡ぐぢゅ♡ぐぢゅぷ♡ちゅぷ♡ちゅっ♡ちゅ♡と激しく抜き差しするのと同期して尻穴もきつく苛んでやれば、たちまちザップは陥落した。

「……っあぁあああああああああああああああああ……！♡　おっ、おまんこだめっ！♡　そこだめ、だめなのおまんこだめっ♡　耳穴べろちんぽでハメながらおまんこいじめんのはほんとにだめぇぇえええっ！♡　おまんこになっちゃう♡　自分でこんなことゆったら俺のケツ穴本当にまんこ扱いになっちゃうのに……っ！♡　も、だめ、がまん、できな……っ！♡　だってそこらめおまんこらめえぇええええええええええええええええっ！♡　まんこっ、まんこ許しておちんぽしゅごいからだめだめもうらめおまんこらめへぇええええええええええええええええええええーーーーーーーー〜〜〜〜〜……っ！♡　許してぇっ、ゆるしへ

……っ♡　おまんこゆるしていやいやいやあぁあああああああああああああああああーーーーーーーーーーーーー〜〜〜〜〜〜〜……っ！♡」

「……あー……、くそ、ちょっとごめん、」

「っぴぁ!?♡」

舌打ちをしたスティーブンは唐突にザップから雄を引き抜くと、仰向けだった身体をぐるんと返してうつ伏せにする。

驚くザップの視界の端っこで、くしゃくしゃになった避妊具が投げ捨てられ、ベッドに叩きつけられるのが見えた。

「ゴム……!?♡　ちょ、あんたっ、まさか……！♡」

「すまん、やっぱり生でする……っ！♡」

「んぎゅいぃいいいいいいいいいいいいいい……っ!?♡」

とっさに逃げようと四つん這いになったザップの腰を掴み、にゅぐぐぐぐ……っ！♡とスティーブンが再び犯す。

彼の台詞と先ほどまでとは違う質感に、ザップはいよいよ、己が女にされるのだと悟った。

「……っやだぁっ！♡　なんでっ、ゴムつけてたのに外すのおぉおおおおお……っ！♡　これじゃマジで俺っ、中に出されちゃう……っ！♡　生で中出しなんてほんとにっ、ほんとに俺……！♡　ヤられちゃうんじゃんっ！♡　やだやだやだあぁああああああああ……っ！♡」

「だから謝ってんだろッ！♡　お前なあっ、こっちが色々計算してお前を悦くしてやろうとしてんのに……っ！♡　おまんこらめぇ♡ゆるしてぇ〜♡だなんて、そんな、そんな……ッ！♡　クソみたいな淫語聞き流してやれるかってんだ！♡　もー決めた今決めたっ、もうぜっっったいお前を俺のもんにするからな!?♡　逃がしてなんかやるもんかっ！♡んなっ、エロい身体しやがってほんとにぃいいいい……っ！♡　分かってんのか馬鹿ッ！♡　こんな無理やりされてなんで感じてんだよ変態ッ！♡　あっちんぽ来たぁ♡って悦んでんのが丸わかりなんだよお前のエロまんこの痙攣でっ！♡　なんとか言ってみろこのお馬鹿まんこっ！♡　生ちんぽが大好物の馬鹿まんこっ！♡　……っくそ滅茶苦茶締まりやがるぅうううううううううう……っ！♡　なんとか言ってみろってんだこのっ、淫乱ッ！♡　淫乱ッ！♡初アナルセックスで死ぬほど感じてるド淫乱チンピラまんこめぇえええええええええええええええええ……ッ！♡」

「やらっ！♡　いやらっ、そんなに何回も何回もバカとかまんことかっ、い、淫乱……っ、とかぁぁあああああああああああああ……っ！♡　なんでこんなっ、怒鳴りながら生おちんぽハメられちゃっひゃらっ、なんでえぇえええええええええええええええ……っ！♡　俺男なのにっ！♡　男なのにちんこじゃなくて……っ♡　〜〜〜〜〜〜

〜〜〜〜〜まっ、まんこでイっぐぅぅううううううううううううううううううううううううううーーーーーーーーーーーー〜〜〜〜〜〜〜……っ⁉︎♡　っひ、あ⁉︎♡」
「誰もイっていいなんて言ってないだろ……っ！♡」
　荒々しく穿たれて背をしならせていたザップの声がひっくり返ったのは、偶然ではない。
　今まさに絶頂せんとしていた男性器の根元をぎゅっと手で掴まれてしまったからで、すなわちそれは、ザップが射精不可能となったことを示していた。
「つな、ウソおぉおおおっ⁉︎♡　なんで、なんで……っ！♡」
「当ったり前だろ馬鹿……っ！♡　勝手にイくな！♡　俺がイくまで、ステイだステイっ！♡　お利口で待ってろ……っ！♡」
「そんな約束してな……っ、おごおぉおっ！♡　ほぉんっ！♡　おぐっ、んおっ♡　ちんっ、ちん……っぽぉおおおおっ！♡　深いっ！♡　ふかぁい……っ、んぐっ！♡」
　片手で細腰を捕まえ、逆の手でザップのペニスを戒めたまま、ごっ♡ごっ♡とスティーブンは剛直を叩きつける。締めつけてくる媚肉の甘さと想い人の喘ぎ声に、脳味噌が酩酊するような錯覚をした。
「気持ちいい……っ！♡　想像してたよりずっとっ♡　仕事で男も抱いたけどさぁっ！♡　こんっっっっっなエロくて、気持ちいいカラダ……っ！♡　男でも女でもっ、お前が初めてだよザップっ！♡　おまんこ気持ちいいっ♡　ザップのまんこ気持ちいいぃいいいいい……っ♡」
「おっ！♡　ごぉっ♡　そこ、はぁあああああ……っ！♡　あンっ！♡　イぎ、た……っ！♡　イぎたいぃいいいいいいいいい……っ！♡　やだぁあっ！♡　あぁっ、あぁぁあああああああああ……っ！♡」
　狙い澄ました手管なんてのは序の口だったと、ザップは身をもって思い知る。
　本格的に欲望をむき出しにしたスティーブンは貪欲で執拗でそうしてとてもいやらしくて、乱暴な抽挿で全身を犯されてしまっているみたいな気さえした。
　あんなにイかされたのに、もうイきたくないとまで言ったのに、解放への欲求が収まらない。収まりもしないうちにまたずんずんとイイところを男根で刺激されて、手元のシーツをぐちゃぐちゃに引っ掻くくらいしかできない。
「イぐぅうううううう……っ！♡　もうだめぇっ、ちんちん壊れちゃうぅうう……っ！♡　ザーメン出せなくて俺のマグナムっ、だめんなっちゃうよぉスターフェイズさん……っ！♡　スターフェイズっ、さぁあああああん……っ！♡」
「っはあ、締まる……っ♡　よし、じゃあこれイったらお前もう完全に俺のもんだからな⁉︎♡　それで良けりゃあイかせて

やるっ！♡　どうだザップっ！♡　分かったか⁉♡」
「そん……っ！♡　へあぅうううっ♡　ふぁう、あ……っ⁉♡　も、やだぁ、イぎたい、イぎたいよおぉおおおおお……っ！♡」
　ごん！♡ごん！♡がん！♡がん！♡と勢いよく雄を突っ込まれると、過剰な性感に溺れさせられてしまいそうだ。
「分かったかって言ってんだ……よッ！♡」
「ぴぁうううううううううっ！♡」
　ひときわ鋭く穿たれてしまって、ばぢん！♡と視界に火花が散った。
　怖いくらいの快感で、腰から下の震えが止まらない。
　胎の中までひくひくピクピク蠢いて、余計にスティーブンのペニスの輪郭を感じてしまう。
「も、いい、それでいいからぁあああ……っ！♡　もうなんでもいいからとにかくイかせ、て……っ！♡」
「言ったな⁉♡　訂正なんかさせないぞっ！♡　ちゃんとイけよっ、『私はスティーブンさんのものです♡』って叫びながらイけ……っ！♡」
「……〜〜〜！♡　ふぇっ♡　えぅ、う……っ！♡　んごぉああああああっ！♡」
　手酷く犯されながらめちゃくちゃなオーダーを突きつけられれば、もはや従うしかないとまで思い込まされてしまった。
　上方向から降り注ぐ声に、疑似的な上下関係さえ感じさせられてしまう。
　あちらが男で、こちらが女役なのだ。
　鳴かせるのはスティーブンだし、ザップはただ、鳴かされイかされ喘ぐのみ。
「あぁああああイぎま、ひゅ……っ！♡　俺はっ、ザップはっ、スティーブンさんのぉおおおおおおお……っ！♡　スティーブンさんのものっ、でひゅううううううううっ！♡　今からマーキングぅ……っ！♡　まんこの中にびゅびゅー♡ってザーメン出されながらあぁああああああ……っ！♡　アクメっ♡　アグメ決めりゅううううううううううううううっ！♡　とめらんないのっ、気持ちいいのとまんにゃいっ！♡　イぎたいイぎたいほんとにイぎたいから早く早くイかせ、っ！♡　あぁあああああああああああああああああー〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜……っ！♡　解放ありがとうごじゃいまひゅっ！♡　いっぱいいっぱい我慢したちんちんでびゅくびゅく出すのきぼちいひっ♡　きぼちいひよおぉおおおおおおおおおおおおおおおおー〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜……っ！♡　射精と同時に中出しもされひゃっへおまんこにっ♡　おまんこにどっくんどっくんスティーブンひゃんの雄汁来てるうぅうううう

ううううっ♡　ザップのおまんこスティーブンひゃんの匂いにさせられちゃっへりゅうぅっ♡　種付けセックスっ♡　ひゃばいっ、これしゅんごいいぃいいいいいいいいいいいいいいいいいい――――――――――――〜〜〜〜〜〜〜んんんんんんんんんんんんんんん……っ！♡」

「はは……ッ！♡」

　息を詰めつつもスティーブンは笑って、ゆさゆさと腰を揺すりながらザップに欲望を射ち込んだ。

　びゅく♡びゅく♡びゅく♡と思い切り注ぎ込んでやっても、ひた隠しにしてきた執着の分、それだけで終わるなんてできやしない。

「あぁ……っ！♡　俺っ、イったばっかなのにいぃいい……っ♡」

「うるさいよ馬鹿っ！♡　俺だってそうだけどっ、嫌だっ、もっとする……っ！♡　ずっと我慢してたんだからな⁉♡　お前を俺のもんにしたくて、ずっと……っ！♡」

「んおおぉおおおおおおおおお――――――――――――〜〜〜〜〜〜……っ！♡」

　熱烈な告白も、耳に入りこそすれザップが理解できているのかどうか。

　とはいえ勢いづいたスティーブンはまた腰を振り始めてしまい、ザップの頭を押さえ込んでシーツに押しつけながら彼の胎内に射精したり、卑猥な動きで下半身を肉棒でかき混ぜつつ射精したりと好き放題だ。

「はぁ♡　はあ♡　ああぁっ、また出されちゃう……っ！♡　おちんぽがオラついてんのが分かっちゃううぅうううううっ♡　もうおまんこ腹いっぱいだよぉ♡　ザーメンもう入んにゃい……っ、おほおぉおおおおおおおお――――――――――〜〜〜〜〜っ♡　種っ♡　子種ぇっ♡　しゅごい来てるうぅうううううう……っ！♡　こんなにされひやら♡　おまんこがっ、ザップのおまんこがスティーブンひゃんのおちんぽミルクに馴染まされちゃうよぉおおおおおおおおおおおおおおお……っ！♡」

「あ――――――――――――――……っ♡　処女だったとは思えないスキモノっぷりでちんぽにしゃぶりついてくるザップまんこ気持ちいい……っ！♡　淫乱まんこに出すっ♡　注ぐぞっ、注ぐ……っ！♡　俺の精液でパンパンになっちまえこの大馬鹿ドすけべおまんこ穴があぁああああああ……っ！♡」

「ほぉっ♡　おんっ♡　ほひえぇええええええええええええええええええええええ……っ！♡」

　受け手の都合関係なしに繰り返し注いで、やっとスティーブンが性器を引き抜いた頃には、ザップはほぼ気絶しかかってしまっていた。

イキすぎたあまりシーツが局所的に汚れていたし、惰性で高く持ち上げられたままの尻からは、受け止めきれなかった白濁がこぽりと漏れてしまっている。

＼／サンプルは以上です！　呼んで頂いて有難うございました！　以下、R-18シーンの抜粋です。

★スティーブン＆レオナルド＆ツェッド×ザップ妄想

いつもの事務所、居心地のいい場所だったはずの室内で、異様な空気が漂っている。

『ね♡　あいつさ、こういうことされて悦ぶ変態だったみたい……♡　びっくりだよねえ♡』

『兄弟子、あなたなんという好色な……！♡』

『ザップさんめっちゃくちゃちんこ勃っちゃってますね⁉♡』

ザップの精液排泄動画を、スティーブンがツェッドとレオナルドに見せているのだ。

携帯電話の小さな画面を共有した彼らは、スティーブンはさも愉快そうに、残りの二人は驚きと高揚をぐちゃぐちゃに混ぜたみたいな表情で、本物のザップと映像のザップとを何度も何度も見比べている。

『や、め、見るな、寄んなっ、俺は、俺はただ……！♡』

『まあそう言うなよ♡　可愛い後輩たちに勉強させてやれって♡　実物の良さっていうのをさあ……♡』

『本当にあれ、合成とかじゃなくて兄弟子本人なんですか？♡　目の前で実演して、確かめさせてください！♡』

『そうですよ！♡　いっつも先輩ぶってるあんたがあんなエッロい声で顔で中出しザーメン気持ちよさそうに排泄するなんて、僕もちょっと信じられないですね！♡　本物かどうか、この眼で確認してあげますから！♡』

『やめろよぉおおおおお……っ！♡　んあっ、あ……！♡』

三人がかりで追いかけまわされ衣服を剥かれて、ザップはあっという間に全裸にされてしまった。

レオナルドとツェッドだけならどうとでもなるのだろうが、スティーブンがひどく威圧してくるせいで、ザップはほとんどなされるがままだ。

『ほら二人とも、仕込みはこうだ♡　このままどびゅるるる〜〜〜〜っ♡ってナカにしこたま出してやれば、こいつ勝手にイきまくるぞ♡　簡単だからやってみな！♡　筆おろしにはうってつけだろ♡』

『は、はいっ、スティーブンさん……！♡』

『すげぇ、ホントに即イキしちゃった……♡　だし、なんつー

顔してんですかあんた♡　アダルトビデオの女優さんみたいじゃん……♡』

『ばかっ、ばかぁ！♡　中に出すなぁっ！♡　お前らも見てんじゃねえよっ、こんなん……！♡　こんなん興奮してっ、イぐっ♡　またイぎゅうぅぅうううううううううううぅーーーーーーーーーーー～～～～……っ！♡』

　後輩たちの見ている前で上司に犯され、何度も胎内に出されてイかされる。

　惨めで苦しくて恥ずかしくて、けれどもそれを全部足したよりもずっとずっと気持ちが良くてザップは淫らに舌を突き出しながら繰り返し果てた。

　来客用のテーブルに突っ伏し、腰を掴み上げられて揺さぶられていると、気が遠くなるくらいに悦い。

『あんっ♡　はあ、ああ、んあぁ、また出てるぅっ♡　おちんぽエキスぶち込まれちゃ……っ、！♡　ンあっ、あぅ、あ……っ！♡』

『っはーーーー～～～こっちは着衣のまんまで、日常を過ごしてる空間で褐色全裸チンピラまんこ非常識にハメまくるのたまんないな♡　征服欲が満たされて、何回だってイけそうだよ♡　君達、これが大人のセックスだぞ♡　えげつないだろ♡』

『はい、勉強になります……！♡』

『スティーブンさん！♡　次、次、僕も……！♡』

『ふざけんなばかあぁああああ……っ！♡』

『じゃあ次少年な♡　ツェッドも是非やってみなさい♡』

『分かりました、頑張ります！♡』

『ひぃ、あ、ああ……っ！♡』

　ザップの抵抗むなしく、今度は普段昼寝したりしているソファの上で、次々後輩たちに身体を貪られてしまった。

『こ、これが、セックス……っ！♡　すごい、気持ちいいっ！♡　スティーブンさんの言う通りだっ、ザップさんのケツ穴ってほんとにおまんこだったんだぁ……っ！♡』

『あ、ァ、こんのクソ童貞がっ！♡　めちゃくちゃな腰振りでイイとこに当ててくんじゃねえ……っ！♡　くそ、くそぉっ、イく、イくぅううううううううううーーーーーーーーー～～～～……っ！♡』

『性交ってこういうことだったんだ……っ！♡　クラクラしますっ、兄弟子がなんだか愛らしくさえ見えて……っ⁉♡　おまんこ気持ちいいっ、生ハメおまんこがとっても気持ちいいですぅううっ！♡　ここにびゅー♡って出したらどんなに、どんなに……っ！♡』

『お魚ちんぽ形がエグいぃいいいいいいっ！♡　ほっそいくせになんで二股なのぉおおっ⁉♡　ちんぽ二本にわかれちゃってるしっ、カリがすんげえエラはってまんこの内側ひ

つかいてくりゅっ♡　すぐイっちゃう即イかされひゃうっ！♡　弟弟子童貞ちんぽで即行アクメっ♡　キメさせられひゃうぅうっ！♡　13歳の凶悪おちんぽしゃましゅごいっ！♡　ダブルおちんぽでアヘ顔不可避っ♡　おっおっおぉおおおおおおおおおおおおおおお――――――――――――――〜〜〜〜んんんんんんんんんんんん……っ！♡』

『はいチェリー卒業おめでとう二人とも〜っ♡　それじゃ次僕な♡　順番こしようねっ♡』

　三人はくるくる交代しながら、かわるがわるザップを犯す。ゲームに興じるように無責任に身体を弄び、イかせて鳴かせてどくどくどくんと体液を注ぐ。

　ソファで、床で、と、体位を変えて性交を愉しみ、うぶだった少年たちも、遊び慣れた男の誘導で容易く道を踏み外してしまっていた。

　わざわざ犯されている彼と目を合わせたり、これ見よがしにケータイで写真を撮ってふざけたり、それから。

『あっあっあぁあああ、こんにゃのだめぇ……っ！♡　見えちゃう、外から俺がハメられてんの見えちゃうからぁああああああああああああああ……っ！♡　あっまたイく♡　イきゅうぅううっ、イくとこ見にゃいれぇえええええええええええ――――――――〜〜〜〜……っ♡』

　執務室を明るく照らす大きな窓にザップの上半身を押しつけ、突き出された尻を間断なく貫いた。

★スティーブン&複数モブ男性×ザップ妄想

　やたらだだっ広いバーのような場所で、ザップはスティーブンに犯されている。

　室内ではたくさんの若い男女、また、ぱっと見た目で性別の分からないような幼い子供が、みな男たちにのしかかられ、淫らな声を上げていた。

『っはあ、スティーブンひゃぁあああん……っ！♡　スティーブンひゃああん……っ！♡』

『ご主人様だ、……ろっ！♡』

『あはァあああんっ！♡』

　どういうわけなんだか、スティーブンとザップとは硬質なテーブルの上に乗り、立位でまぐわっていた。

　背後からまさぐられ、スティーブンの雄で強く穿たれたザップは舌を垂らして喘いでいる。

『あぁ、ご主人ひゃま……っ♡　おちんぽお恵み、ありがとうごじゃい、ま……っ♡』

『そうそう、それでいいんだ……♡　僕の可愛い、性奴隷ちゃ

ん……♡』

口づけを与えられて必死にスティーブンの唇を貪るザップは、なんとも珍妙な格好をしていた。

頭にはホワイトブリム。

ワンピースの袖は大きめのシルエットで、なにもしなくても股間が見えるような短すぎるスカートの上に、白いエプロンをつけている。

『オラオラ系チンピラっぽい子がフリッフリ且つおリボンたっぷりのエロメイド服着せられてパコられてるとかたまらないねえ♡』

『また表情がスキモノっぽいですからねぇ！♡　ザップちゃ～ん♡　エッチなメイドさん、こっち向いておくれ！♡』

『はひぃ……んっ♡』

野次の通りで、ザップの格好はよくあるメイド服よりも、ずいぶんと凝った装飾をしていた。

ブリムにもエプロンにも、これでもかというほどリボンやフリルが施されているし、スカートだって短いくせに幾層にも重ねられたレースでいやにボリューミーだった。

色合いもモノトーンではなくパステル調のピンクと水色を基調としたもので、同じ色のオーバーニーソックスと合わさると、ラブリーっぷりが半端ではない。

ただし胸元はハート型に切り抜かれたデザインになっていて、左右の乳頭が思いっきり露出してしまっている。

さらにそこはパステルピンクとホワイトのリボンやパールがあしらわれたニップル用のネックレスで飾られており、勃ち上がった乳首が妙に悪目立ちして見えるのだった。

スカートの短さゆえにほとんどモロ出しになっている陰茎や玉袋にもリボンやパールが添えられて、おまけに尿道にぶっすりと差し込まれたブジーには、『私はエッチな雌犬メイドです♡　おちんちんお仕置きしてください♡』と丸文字で書かれた、ハート型のメッセージカードがついていた。

クラシカルなメイドスタイルというよりは、あからさまに風俗店のメイドコスプレである。

スティーブンの好みで選ばれたその衣装を着せられて、ザップはテーブルの上に立ったまま、背後から犯されてしまっていた。

眼前には涎を垂らさんばかりに興奮した中高年の男がひしめき、隣に座らせた女の乳を揉みしだいたり、抱きかかえた少年の幼いペニスをずるずる剥いたりしながら、ザップたちのセックスを鑑賞している。

『んあぁぁあっ！♡　はぁあんっ、あぁ……っ！♡』

『あーーーーーー……、気持ちいい……♡』

『イ……ぎた……っ！♡　イぎたぃ、イきたいよぉおおおお……っ！♡』

スティーブンは好き勝手に腰を振ってくるのだが、ブジーを差し込まれてしまっているためにザップはイくことができない。

ピストンの勢いで勃起ペニスをぶるんぶるんと上下に揺らしながら、ザップはすぐ目の前にいる、観客の男に助けを求めた。

『なあ、なあ、あんた……！♡　これ、これ取ってぇ♡　ちんちん串刺しになってんの、つらいのぉ……っ！♡　お願い、お願いぃぃぃぃぃぃぃぃ……っ！♡』

いかにも身なりのいい金持ちそうな男は、ザップの懇願を聞いてにたりと下品に口をゆがめた。

『うーーん、取ってあげてもいいけど……♡　タダじゃ嫌だなあ♡　だって世の中ギブアンドテイクだろう？♡　ただのお人好しじゃあ、経営者なんてやってられないからねえ♡　だから、交換条件にしよう♡　私がこのブジーを抜いて、君を気持ち良ぉくイかせてあげる♡　だから君は、私とセックスして私を気持ち良くさせてくれたまえ♡　ね、これでイーブンだろう？♡』

『んなわけぇ……っ、ふぁんっ！♡　ちょっとスティ、あんっ！♡　あぁあああああああああ……っ！♡』

『さあーてどうしようねえ、ザップ♡　おじさんに助けてもらう？♡　それともこのまま？♡　ねえ、ねえ♡』

ばちゅばちゅばちゅばちゅ！♡と荒々しく肉棒で掻き回されれば、いっぺんに追い詰められる。

イきたくてイきたくて、それでもまったくイけそうになくて、ザップはとうとう涙ぐんでしまっていた。

ガーリーなスカートから伸びた細い足が、頼りなげにかたかたかたかた震えている。

『い……やだっ、もうイきたいっ、イきたいぃぃぃぃぃ……っ！♡　けどっ、セックスはやだ……っ！♡　だって俺は……！♡　あんたが、……相手があんただから……っ！♡』

『ブジーは抜いて欲しいけどカラダは差し出さないってこと？♡　それは取引としてイマイチすぎるから成り立たないねえ！♡　じゃあ残念、ほったらかすね♡』

『おやおや困ったねえ～♡　ザップのおちんちん、もう限界なのにね？♡　大丈夫なのかなぁ～♡』

『ひぅぅ……っ！♡　ひ、ぐ……っ！♡』

腰をグラインドさせて、スティーブンが狙ったように、ザップの悦いところを擦ってくる。

あまりの容赦のなさに、ぽろんと目尻から涙の粒が落ちた。

今にもザップが他人に犯されそうだというのに、どうやらスティーブンは、そんな状況を面白がっているらしい。

『お前のエッチなとこ見せてよザップ……♡　結局ちんぽなら誰のでもいいんだろ？♡　すけべだねえ、ほんと……♡』

『そうだよぉザップちゃん♡　ご主人様がお望みなんじゃないか♡　ほーら、抜いたらおちんちん気持ちいいぞ～……♡』
『ほぎょぇあああああああああああああああーーー

いような、大きな声で♡　おちんぽハメてくださぁい♡って言ってみて……♡』

『～～～

受け手側の快楽をまったく考えない自分本位なやり方で、男がむぢゅうぅぅぅぅぅぅぅぅ〜〜〜〜……っ！♡と、口を尖らせてザップの唇に吸いつく。

いきなりのことに目を白黒させるザップだったが、事態はよりいっそう過酷な方へと進行していた。

『ほむぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅっ!?♡んむぅぅぅぅぅぅぅぅっ、むぐぐぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅーーー

まのオンナになりますから全員で犯してっ！♡　お好きなだけマワしてくだひゃいこのおまんこはみなさまのモノですぅっ！♡　フリーおまんこ集団でパコパコしてくだひゃいっ！♡　もう好きにしてくれていい、からぁ……っ！♡　イかせ、て……っ！♡　イき、た、もう……っ！♡　んおあぁああああああああああっ！♡　あっはあぁあああああああああああああああああーーんんんんんん……っ！♡』

『あー僕も出る……っ！♡』

『噴水発射ぁ～～～～～～っ！♡』

男がずぼんっ！♡とブジーを引き抜くと、ザップは背を反らせ、痙攣しながら大量の精液を宙に放った。

つられてイったスティーブンに中出しをされ、その刺激でまた、ザップが立て続けに射精する。

ぶぴゅうっ！♡ぶぴゅるるっ！♡びゅくるるる……っ！♡と吐精が終わるなり男はザップをひったくり、テーブルに突っ伏させて猛然と犯し始めた。

『お約束ですからねえ♡　それに、私だけではなくて、この場にいる全員が許可を頂いたようですから……っ！♡』

『あんっ！♡　あん！♡　あっちんぽっ！♡　スティーブンさん以外のおちんぽぉおおおおおおお……っ！♡　刺さってるっ！♡　ひいっひいっひぃいい……っ！♡』

男が単純に快楽のみを求めた結果、ザップは腰のあたりで後ろ手に拘束され、不自由な姿勢で抽挿の餌食になっていた。

『あー気持ちいい……♡　やっぱりよそのまんこはたまりませんなぁ♡　それも彼氏の前で裏切り宣言させた挙句ハメまくっていいだなんて♡　はー愉しい♡　さあザップちゃんおまんこ汚染するよ♡　別の男のお精子で君のまんこを単なるアバズレに落っことしちゃいます♡　不義理ミルクをしっかりおまんこで受け止めてね♡　出すよ♡　出すよ、出すよ、出しちゃうよっ！♡　逃げるなら今だけど……っ、はい時間切れ～～～～～～～！♡　不貞まんこか～んせ～いっ♡　どぴゅどぴゅどぴゅどぴゅ～～～～～♡　あははははっ！♡』

『んおぉおおおお、お……っ！♡　知らない人のっ、ザー汁うううううううううううううう……っ！♡　まんこにどくんっ♡どくんっ♡って注がれ、……っ！♡　あぁ……♡　だめだぁ、イくぅうううううううううううう……っ！♡』

力なく鳴いて絶頂したザップに、男はぐりぐりと下腹を押しつけ精液を一滴残らず注ぎきった。

『あぁイイ体験だった……♡　おっと、すごい人数ですなあ♡』

『な……!?♡　ウ、ソ、こんな……っ♡』

今しがたザップを犯していた男の背後には、ずらりと何十人もの男たちがペニスを臨戦態勢にして行列を作っていた。

順番が交代し、今度は二人組の男たちが、ザップを仰向けにして勝手に挿入し始める。
『んぶあぁあっ、あ……っ！♡』
『ははっ、たくさん出されちゃったねえ♡　まんこぬるっぬるだよ♡』
『おクチおまんこもしっかり使おうねー♡　働き者のメイドさんっ！♡』
ザップは股を限界まで開かされ、両手首を掴み上げられてアナルと咥内とを犯されていた。
上等な身なりをしているくせに男らがやたらと乱暴にザップを貪るので、がたがた、がたん！とテーブルが大きな音を立てている。
『んぶぉお……っ！♡　んんんんんんんんんんんんーーーーーーーーーー～～～～～……っ！♡』
『はっはっは、息が苦しいのかな？♡　いーい締まりだねえぇ、中古品とは思えないなあ♡』
『窒息寸前の喉まんこの締めつけ、たまらん……っ！♡　もう少しっ、もう少しだけ……！♡　ははははは、搾り取られてるっ♡』
無理やりに首を反らされ喉深くまで男根を突っ込まれたまま射精されてしまったザップは、同時に、アナルにも精子を注がれてしまっていた。

客観的には苦しいだけの拷問に見えても、それでも。ザップの男性器は、だらだらとだらしなくイきっぱなしになっている。
『さあ今度は四人いっぺんにお相手しよっか！♡　ぎっちぎちおまんこ魔改造だぞぉ～～～～～～～……っ！♡』
『お、ご、んごぁあああああああああああああああああああああああ……っ！♡』
順番が代わるたびに下劣な行為はエスカレートし、ついには四人が一人を犯すという鬼畜っぷりにまで到達してしまった。
床で騎乗位をさせられているザップの肛門にはすでに陰茎が一本入っているというのに、背後から来た別の男が、無理やりもう一本追加しようとしているのだ。
いくら並のサイズとはいえ、二本一緒になんてそうそう入るわけもない。ぎぢぎぢ♡みぢぢ……♡と排泄器官が嫌な音を立てるのを、ザップは泣き喚きながら聞いていた。
『だ……めっ！♡　二本いっぺんになんてっ、だぶりゅおぢんぽなんて入んない入んないおまんこに入んないっ！♡　一人ずつにしてっ！♡　一人ずつならいつでも犯されてあげるかりゃっ！♡　一発ハメるごとにおまんこハメハメありがとうパパぁ♡ってお礼だって言ってあげるしっ！♡　アイドルグループの女の子のエロコスしてっ、エロ振り付けでおちんぽ欲しい欲しいダンスしてあげるのだっていいしっ！♡　ザップの、おちんこも、おまんこも……っ！♡　たっくさんどア

ップで写真や動画を撮ってっ、それでネットに流してくれちゃってもいいからぁっ！♡　だからだぶりゅはや、め……っ！♡　んおっほおぉおおお

のゲストが来てくれることになったんだ♡　愉しんでくれよな……♡　さあ、入っておいで♡』
『失礼します……』
『ん、な……っ!?♡』
　ラブホテルの扉を開けて入ってきたのはスーツ姿の黒髪の女性で、ザップは驚きにぱっと目を見開く。
『犬女……っ!?♡　な、なんで……っ!?♡』
『アンタに関係ないでしょ』
『やあ、チェイン♡　いらっしゃい、よく来たね♡』
『はい、スティーブンさん……♡』
　スティーブンが手招きすると、チェイン・皇はゆっくりとベッドに近づいてきた。
　ザップは慌てて姿勢を直そうと試みるのだが、女たちの手が、そんな誤魔化しを許してくれない。
『俺とお前がいい仲で、ドMの雌犬にぴったりの変態セックスを日々探求してるんだって話したら、チェインも協力してくれるんだってさ♡　心強いだろう？♡　これまで遊び相手だった愛人たちに囲まれて大股開かされてるとこなんて、知り合いの女性に見られたら滅茶苦茶恥ずかしいもんなあ♡　ね、チェイン♡　君こいつのこういうとこ見てどう思う……？♡』
『お話伺ってまさかとは思ってたんですけど……ほんとに正真正銘、生粋のド変態だったんですねこの猿♡』
『うぐ……っ！♡』
『ちょっと、チンポ硬くなってるじゃない淫乱♡』
『るせぇ……っ！♡』
　年下の彼女から見下ろされて罵倒されて、それでもって勃起ペニスをびくびく脈打たせているのだから我ながら性癖がどうしようもない。
　スティーブンとなにやら目配せをすると、チェインは、自らボトムを脱いで腰から下だけ下着姿になった。
『勘違いしないで……、アンタがスティーブンさんのお気に入りだから、付き合ってあげるだけだから♡　せいぜい愉しんでなさい……、よっ！♡』
『うぶぅうっ!?♡』
　威圧的な台詞とともに顔面に押しつけられたのは、チェインの臀部だ。
　顔面騎乗をされてしまったザップの鼻先に少し湿った下着が当たり、くちゅりと淫らな音を立てる。
『いやあ絶景だ……♡　知ってる顔同士がいやらしいことしてるとこ見ながらセックスできるなんて最高だね♡』
『スティーブンさん……！♡　お役に立てたんなら嬉しいです♡　こんなことでよければ私、いくらでも……っ！♡』
『有難うね♡　君みたいな優秀な部下がいて助かるよ……

♡　じゃあ僕も少し愉しんでもいいかな？♡　君のその大きなおっぱいを揉ませて欲しいんだけど♡』
『もちろんです！♡　どうぞ、お好きなだけ……っ！♡』
『んぶあぁぁぁあっ!?♡』
　直球のセクハラをかますスティーブンもスティーブンだし、それに喜んで応じるチェインもチェインだ。
　尻の下敷きになりつつ動揺するザップをよそに、スティーブンが両手で、チェインの乳を遠慮なく揉み始める。
『やあ、弾力がいいな……♡　君、処女なんだろう？♡　胸を揉まれるのは？♡』
『ち、ちょっとした痴漢とかはありましたけど……♡　こうやって正面から、両方いっぺんにっていうのは、初めてで……♡』
『そうかそうか、君の初めての男になれて嬉しいよ♡　もっと強く揉んでも？♡』
『ど、どうぞ……！♡　あなたになら、なにをされても……っ！♡』
『!?♡　ぶぇ、うぶ……っ！♡』
　頭上で交わされる会話も信じられないし、顔面に当たるチェインのパンティがどんどん濡れていくのだって信じられない。
　愛液が染みた状態でチェインが腰を前後するものだから、ザップとの間でクチュ♡クチュ♡と卑猥な水音が鳴り響いている。
『本当に大きくていいおっぱいだね♡　張りがあって、手のひらから溢れるボリュームがたまらないな……♡　サイズいくつなの？♡』
『バ、バスト、サイズは……♡　こないだ測ったらまたおっきくなってて……♡　トップが100で、Iカップ……♡　でした♡』
『スリーサイズは？♡』
『はいっ、スリーサイズは……っ！♡　100・58・88、で……、す……♡　あの、胸が大きすぎるとだめですか……!?♡』
『とんでもない♡　グラマーな女性は好きだよ♡　それだけ抜群のスタイルだったらポルノ女優にだってなれそうだね♡』
『あ、ありがとう、ございま……す……っ♡』
『ん、ぁ、あ、あ、あぁぁぁあああああああああああーーー

さ……♡　今日は勿論ノーブラで来てくれたんだろう？♡』
『はいっ、言いつけ通りに……っ♡　ブラジャーなしで、電車で移動してきました……っ！♡　胸がゆっさゆっさ揺れて、いろんな人の視線を浴びました……っ！♡　恥ずかしくってアソコが熱くなって♡　でも、スティーブンさんのためなら、私……っ！♡　どうぞ……っ♡　チェインのおっぱいですっ、どうぞっ、スティーブンさん……っ！♡』
『ああ……、想像通りだ、素晴らしいね♡』
『んん……っ！♡』
　シャツとジャケットを緩め、ぼいんっ♡と突き出した巨乳へ息を吹きかけられて、チェインは身を竦める。
『それに、吸いつきたくなるような陥没乳首じゃないか……♡　エッチだね♡　恥ずかしがり屋さんのお顔を出してあげるよ♡　自分でおっぱい持ち上げて、僕の口元へ持って来て……？♡』
『……はいっ、どうぞ……♡　チェインの乳首をっ、あぁああ……っ！♡　んあぁあああああ……っ！♡』
　チェインが自ら両胸の下に手を入れて持ち上げると、しっかり埋まった乳首のあたりを、ぱくん♡とスティーブンが銜え込む。
『おっぱい♡　チェインのおっぱいちゃん、Ｉカップ巨乳の先っぽちゃん♡　出番だよぉ、出ておいで……♡　ハニートラップ上等で生きてきたテクを駆使して、処女乳首めっちゃくちゃにしてあげる♡　ぺろぺろして、ちゅーちゅーして……っ♡　あ、出てきた出てきたぁ♡　ふうん、君ってデカ乳なのに乳首ちっちゃめで可愛いねえ……♡』
『んあぁあああっ、スティーブンさん……っ！♡』
『んおっ♡　おっ♡　おぅ♡』
　セクハラトークが垂れ流されるなか、ザップはぬこ♡ぬこ♡ぬこ♡ぬこ♡とアナルを食い物にされていた。
『あー乳首出てきちゃった、両方♡　つーん♡ってしてエッチだね♡　もっと乳首舐めて欲しい？♡』
『はい……っ！♡　はい、スティーブンさん……っ！♡』
『それじゃそんな態度は改めなきゃね♡　自分でおっぱいの根元を掴んで、上下にぶるぶる振ってごらん♡　みっともない愛撫乞いのおっぱいを見せつけて淫語でおねだりしてくれたら、続きをしてあげてもいいかなあ♡』
『ああっ、そんなぁ……っ♡』
　チェインは白い頬を真っ赤にして、それでも意志を感じる手つきで、自身の乳肉の根元を掴んだ。
　そうして手首のスナップを利かせれば、ボリュームたっぷりなバストなだけに、ぶるんっ♡ぶるんっ♡とド派手に揺れる。
『はぁ……っ♡　スティーブン、さん……っ！♡　愛撫乞いおっぱいっ、ごらんくださいぃぃ……っ！♡　Ｉカップバス

トがぶるんぶるん揺れてあなたのぺろぺろをお待ちしていますぅ……っ♡　ぶるんぶるんっ♡　ぼいんぼいん……っ！♡　あの、どうかっ、チェインのおっぱい舐めてください……っ！♡　陥没してた処女乳首をっ、オトナのオンナにしてください……っ！♡　揺らしますっ♡　すけべぱいぱい揺らしますっ！♡　だからどうぞっ、スティーブンさぁあん……っ！♡』

『ほぉおおんッ！♡』

ピュウ♪♡と口笛を吹き、スティーブンがぬごんっ！♡と唐突にザップを強く穿った。

どうやら興奮してきたらしい。

『処女にしちゃ上出来じゃないかチェイン！♡　さてはこの手の本かビデオかで、しょっちゅうオナニーしまくってたんだろう♡　白状しなよ♡』

『あああぁあ……っ！♡　見透かされちゃったぁ……っ♡　あの、エッチな本、で、毎晩……っ♡　おまんこを……♡　クチュクチュ、って……！♡』

『ああー言っちゃったね本音出ちゃったね♡　普通の女はおまんこなんて自分で言わないんだぜチェイン♡　これで君がいやらしい女なのは確定だ♡　そんなカラダしてるからね、そうなんじゃないかと思っていたけれど……♡』

『ああんっ！♡』

スティーブンが意地悪く笑って、チェインの胸をぴん！♡と丸めた指で弾いた。

『もう洗いざらい吐いちまえよ♡　君、僕でオナニーしただろう？♡　こんなにもエッチな君が、想いを寄せる僕で何かせずにいられるわけないもんな♡』

『そ、そんなぁ……っ♡』

『答えなって♡』

『あうぅうんっ！♡』

スティーブンはチェインの両方の乳首を摘まみ、無理やり上方向に持ち上げた。

引っ張り上げられてしまったたわわな胸は縦長に形をゆがませて、見事な流線型になってしまっている。

『毎晩したんだろ……♡』

『あぁあ……っ♡』

『正直に言えって♡　僕で毎晩オナニーしてたんだろ？♡』

『ん、う……っ！♡』

『どんなシチュエーションを想像してたの？♡　ラブホテル？♡　僕んちのベッドかな？♡　それとも……、事務所でこっそり、とか？♡』

『ひあぁあああああっ！♡』

こりこりこりりっ！♡とスティーブンの指先がチェインの乳首を素早くこする。

途端に、じわぁ……っ！♡と、下着を通過した愛液がザップの唇へ降りていった。
『僕、気に入った相手以外に待たされるの好きじゃなくてね……♡　あんまり生意気すると、こうだよ？♡』
『んぁンっ！♡』
左右の乳首を片手でまとめて摘まみ上げると、スティーブンはチェインの乳房を、平手ですぱぁんっ！♡と叩いてみせる。
『ほら、ほら！♡　デカぱいが腫れてもっとでっかくなるまで引っぱたいてやろうか♡　痛くてシャツにしまい込めなくなったら困っちゃうだろうねえ♡　おっぱい露出したままお仕事するかい人狼さん♡　あぁ、生理になったら消えられないんだっけ♡　じゃあストリッパーにでも転身したらいい♡　君のそのカラダなら、すぐに大金をパンツに突っ込んでもらえるよ♡　いいモノ持って生まれてきたねぇ……っ！♡』
『あぅんっ！♡　はぁっ！♡　んはぁあっ！♡　あん……っ！♡　ごめんなさい、言いますぅっ！♡　正直に言いますからぁあああああ……っ！♡』
ばしんッ！♡ばちんッ！♡ぱぁあんッ！♡と乳を繰り返しぶたれて、チェインの声は震えている。
けれどその音域がいやに媚びた風であることに、ザップはなぜだか親しみを覚えていた。
『しました……っ、スティーブンさんで、オナニー……っ！♡それも毎晩、です……っ！♡　ちゃんと話せた日とかは嬉しくてっ、寝る前に何度も、何度も……っ！♡』
『今まで想像した中で一番エッチなやつ教えて？♡』
『それ、は……っ！♡　あうっ！♡』
またすぱぁんっ！♡という小気味よい音がして、折檻の度合いが見えなくとも分かる。
はぁ、はぁ、と、荒くなっていくチェインの呼吸が艶っぽい。
『結婚式……、ですぅっ！♡　知り合いをたくさん集めた式場でっ、ち、誓いの、キス……、じゃなくてっ！♡　誓いの、公開セックスを……っ！♡　私の処女が奪われる瞬間をっ、みんなに見て撮ってもらってましたっ！♡　おっぱいもおまんこもモロ出しのエッチなウェディングドレス着てっ、M字開脚で抱え上げてもらって、新郎姿のスティーブンさんにそのまま……っ♡　おちんちんを入れてもらって、奥までハメたまんまで記念撮影を……ッ！♡　あァんっ！♡』
『……っぷはははッ、傑作だな君っ！♡　いやぁ～処女の想像力は怖いねっ！♡　まあ君と結婚式はしてあげられないけど……♡　本命と結婚式するときには、参考にさせてもらうかもね♡　素敵なアイデアを有難ぅ♡　お礼にキスしてあげようか？♡』
『……っ！♡　あ、お、お願いしますっ！♡　ぜひお願いし

ま……、ん、ん……っ♡』

『んーーーーーーーー〜〜〜〜〜……♡』

『ひィ、あ、あぁああっ！♡　おまんこっ！♡　おまんこにひどいことしないれ……っ！♡　あ、ァ♡　ひぃ、ひい……っ！♡　イぎゅうぅうううーーーー〜〜〜〜……っ！♡』

　口づけなんて未経験なのだろうチェインに本気のディープキスをぶちかまし、スティーブンはぐりぐりと腰を使ってザップのアナルを掻き回す。

　大きな胸を鷲掴みにされ揉みしだかれ、玄人の手管で咥内を女性器のようにされてしまっているチェインの前で、ザップは下肢を跳ねさせ、絶頂してしまっていた。

『あは、イったイった……♡　有難うねチェイン、うまいこと興奮させられたみたいだ♡』

『……あ、は、はい、そうでしたね……♡　銀猿を、気持ちよく、させるんでした……♡　あの、スティーブンさん……、あの、よかったら、もう少し、キス……♡』

『うん、また後でね♡　さあもっともっとコイツをイかせてやりたいんだ……♡　勿論協力してくれるよね、チェイン♡』

『……は、い……っ♡』

　スティーブンがなにやら耳打ちすると、意を決したようにチェインが立ち上がる。

　そうしてするるとパンティを脱ぎ、白い尻肉をぺろん♡と露わにしてしまったので、ザップは思わず大声で叫んだ。

『な!?♡　ちょ、待、犬女っ！♡　待て、待て、待て、それはヤバい、ヤ……っ！♡　うわぁああああああああああ!?♡』

『スティーブンさんの頼みなんだから……！♡　勘違いしないでよ、バカ……ッ！♡』

　そのままチェインがしゃがみ込んだので、ザップの目の前には、黒々とした縮れ毛と、その奥の割れ目がいっぱいに広がっていた。

『な、な、な、な……!?♡』

『じゃあチェイン、ザップの顔の真ん前でおまんこくぱぁしてよ♡　むわわん♡って漂う雌臭嗅がれながら、自分の指でおまんこ思いっきりくぱぁしてね♡』

『……はいっ、スティーブンさん……っ！♡』

『うわぁあああああああっ！♡　わあぁあああああ……っ！♡』

　一応、ザップにだって、最低限の倫理観というものがある。だからこそ派手に遊んでもライブラの人間には手を出さなかったし、女関係のトラブルだって、ザップの許容範囲にはしっかり収まっていたのだ。

　しかし、これはいくらなんでもやりすぎだった。

　ザップの視界いっぱいにチェインの真っ赤な媚肉が広がり、くっぱ♡くぱぁ♡くっぱ♡くっぱ♡と繰り返し、卑猥な動きで開け閉めをされている。

こういった行為を商売の道具にしている愛人たちにやらせるのとは、わけが違うのだ。
まだ男も知らない職場の同僚の、見てはいけない部分を、これ以上はないというくらい近くで限界まで見せつけられている。
彼女が喜んでやっているというのでももちろんなくて、すべては想いを寄せる上司、スティーブンの命令だから従っているだけなのだ。
可哀相だ、と思う気持ちがあるにはあるのだが、ただやはり眼前でぱくぱく口を開けたり閉めたりする女陰なんてものは目の毒には違いなかった。
あの性格でさえなければ、職場の同僚でなければ、チェインは可愛い顔をした、スタイル抜群の魅力的な女性だ。
こういう関係でないのなら見かけた時点で即ナンパしただろうし、プレゼントでもしてなんとかベッドインできないかと三か月くらいは努力しただろう。
そんな相手の、女性器開閉ショーを至近距離で見せつけられている。
スティーブンのからかった通り、ザップの鼻孔をふわん、とよく知った、メスの匂いがくすぐった。
『こういうときはね、女性はエッチなことを言って男を誘うもんなんだよ♡　私のおまんこ見てくださいザップ様ぁ♡って言ってごらん♡』
『う……、そ、それは……っ♡』
『僕の言うことが聞けないの？♡』
『あァんっ！♡　すみませんスティーブンさん乳首そんなにひねりあげないでぇ……っ！♡　言います、言いますからぁ……っ！♡　っわ、私、の、おまんこ……♡　見てください♡　ザップ様ぁ……っ♡』
『ひェ……！♡』
ザップのペニスがみるみる硬くなる。
なにせ、あの意地っ張りなチェインが、ザップ様、だなんて媚びるようなことを言わされているのだ。
別に同意しているのでもなくて、スティーブンに逆らえずに、というところが、むしろ下腹にグッと来た。
『……っお、おまんこ、見てくださいザップ様ぁ♡　おまんこ見てください……♡』
『芸がないねえ♡　工夫して言えないかな？♡　ほら、例の処女の豊かな想像力でさぁ……♡』
『んん、ン……っ♡』
『うわ……！♡』
スティーブンに意地悪を言われた途端、チェインのヴァギナからとろん……♡と、愛液が溢れ出る。
こいつもいじめられると感じるんだ、と、ザップは無意識に

唾を飲んだ。

『～～～～チェ、チェインの、おまんこぉ……♡　処女の穴、です♡　まだ誰も見たことないチェインの、まんまん……っ♡　初めて見るのはあなたですっ♡　ザップ様、ザップ様ぁ……！♡　ぱっかぱっかくっぱくっぱ♡　お肉開いて、どうぞいたしまぁす……♡　チェインのおまんこのお肉……っ♡　ぐっぱぁあああああああああああーーーーーーーーーーーーーー～～～～……っ♡ってして……♡　きゅうって閉じて♡　もっかいぐっぱぁあああああああああああああああああああーーーーーーーーーー～～～～……っ♡ってフルオープン♡　じろじろ見てやってくださぁい♡　淫乱処女♡　チェイン・皇ですぅっ♡　おっぱいの大きな未使用品、で、す……っ♡　あぁっおまんこ濡れてきちゃったぁ♡　ザップ様にエッチな声聞かれておまんこの中じーって見られてっ、スティーブンさんにも全部全部聞かれて見られてるって思ったらマン汁が……っ！♡　あひっ、はひっ♡　あちゅいっ、おまんこあちゅいのぉっ！♡　淫乱爆乳処女っ、チェイン・皇れすぅっ！♡　処女のこじらせ性欲詰め込んだおっぱいこんなにおっきくなっちゃったぁ♡　あっあっスティーブンさんに乱暴にもみ♡もみ♡もみ♡ってされたらあ……っ！♡　エッチな気分になっちゃうっ！♡　おまんこの奥からじわぁ♡ってエッチなのが来ちゃうよぉっ！♡　銀猿……、じゃなかったザップ様が見てるのにぃっ♡　悔しいっ、悔しいけどすっごくっ、すっごくきぼちイ、イ……っ！♡　んあぁあああああっ、ああん……っ！♡』

『うお……♡』

ぴんと張るまで全開になった陰部と、どろろろろっ！♡と一気に膣口が濡れるさまは、さすがのザップにとっても強烈な絵図だった。

びくん♡びくっ♡と主の興奮を見た目に表した勃起ペニスを指差して、スティーブンがさらにチェインへ命令をする。

『じょーずじょーず♡　じゃ次、フェラしてみよっか♡』

『え……♡』

『おいおい、カマトトぶるなよ♡　だからさぁ、フェ・ラ・チ・オ♡　ザップのちんこしゃぶれって君に言ってるの♡　まさか見たことも聞いたこともないってわけじゃないだろ？♡』

『……れは、その……♡』

『おいやめとけチェイン！♡　別にお前にそこまでされる理由はな……、ン！♡　んっ、んんっ、んうぅうううううううーーーーーーーーーーーーーー～～～～……っ！♡』

『スティーブンさんの、ためだから……っ！♡』

ぱっくり開いた秘部はそのままに、チェインはうつ伏せになって、ザップの男性器を銜え込んでいた。

『ちょ、待……ッ！♡　やめろってマジでお前今はヤバ

……！♡　ん、ぐ、んんんっ！♡』

『そうそう、上手だね♡　やっぱりエッチな子は才能があるよなあ♡　ペニスの周りの皮膚もれろれろしてくれたら感じるしね、タマも大事なんだよ、タマも♡　金玉ベロで転がす感じにしてさ、やさしーーーく、しゃぶってやって？♡』

『はい、スティーブン、さん……っ♡』

『……ッ！♡　タマはやめ、ろッ！♡　やめろってバカッ！♡　あっあっ、あぁぁぁあああああああ

〜〜……っ！♡』

すかさずザップがチェインを掴み、陰部を割って猛烈な勢いで吸いつく。

じゅばじゅばべろべろぬちょぬちょぐぢゅぢゅ！♡と卑猥な水音もさることながらその責めは的確で、チェインはあっという間に舌を突き出した、下品な顔つきになってしまった。

そこでスティーブンが、ザップに挿入したままだった雄を、ぐぽん！♡と鋭く一突きする。

『んォええ……ッ！♡』

『これじゃあ初心者のチェインが不利だからねえ♡　僕が加勢してあげよう♡　さあザップのちんこしゃぶって♡　早くイった方は罰ゲームってことにしようか♡』

『そん……ッ、あぐぅっ！♡　んほぉっ！♡　あ、あ、やめへ、そんにゃ突かないでぇ……っ♡』

『スティーブンさん……っ♡　スティーブンさん、スティーブンさぁん……っ！♡』

悪い顔をしてずんずんザップを犯すスティーブンを、チェインがうっとりと、宿敵の肉棒を頬張りながら上目遣いに眺めている。

『あっあっイっちゃうぅ……っ！♡　頑張ってSSちんこしゃぶってるのにっ♡　おまんこ銀猿にちゅぱちゅぱされちゃってすごいのク……るっ！♡　遊び人のテクひゅごいいいいいっ！♡　おまんこっ、おまんこの中ぢゅぽぢゅぽされちゃってまひゅスティーブンひゃあんっ！♡　他人におまんこ舐められるのってこんなに、こんな、に……っ！♡　んあぁあっ！♡　あっ！♡　クリ剥かれてるぅっ！♡　クリトリス敏感なとこ剥き剥きして露出させられてちゅうちゅう吸われてりゅうぅうううっ！♡　ビラビラも舌でなぞられてっ♡　あっあっ♡　いやなのぉ！♡　いやなのに猿のテクでイかされりゅうぅうう……っ！♡』

『それは大変だ♡　僕のことが大好きなチェインちゃんは大好きな僕の見てる前でクンニ実況してアクメ競争負けちゃいそうなんだねえ♡　頑張れ頑張れ♡　応援してあげよう、ザップのイイとこずんッ！♡ってしてあげるからね♡　ずんずんずんッ！♡ってしたらほら、クンニの舌が弱まるからね♡　もう少しだよ頑張れチェイン♡　ファイト♡　ファイト〜っ♡　ザップのおちんちんに吸いつけ〜♡』

『うンンんん……っ！♡　早くイけぇバカ猿……っ！♡』

『お前こそっ、ウシ乳女めぇぇぇぇぇぇ……っ！♡』

罵りあう二人は互いの性器を舐めて吸って、高みの見物状態のスティーブンは、好き勝手にザップのアナルを犯している。

とんでもないシチュエーションに昂っているのは三者とも同様で、フー♡フー♡はぁ♡はぁ♡という荒々しい息遣いは、もはや誰のものとも言い切れない混じり方だった。

『あ、ほら、ザップのまんこがイく寸前のピクピクをしてるよ♡　チェイン、頑張れチェイン♡　あと少しだ！♡　負けるな！♡　おっぱいもっと押しつけてさ、煽れ煽れ！♡　頑張れ～っ♡』
『んんぁあ……っ！♡　だめです私っ、スティーブンさん……っ！♡　ごめんなさいせっかく応援してもらったのにごめんなさいっ！♡　もうイくっ、銀猿のベロにイかされりゅうぅぅぅ

濡らした。

ひくひく震えながら、それでも女陰を閉じることなく、健気に想い人を見つめている。

『……は、はい、スティーブンさん……♡　あなたと……、あなたにっ、おまんこして欲しいです……♡』

『それはそれは光栄だな♡　じゃあザップにハメながら君とおまんこするか考えたいと思うから、君の出来る限りの淫語で誘って僕をその気にさせてくれるかな♡　僕、ガニ股でおまんこをくぱくぱ思いっきり開け閉めしながらおまんこまんこ～♪♡まんこっこ～♪♡パコパコプリーズプリーズファックミ～♪♡って即興のお歌歌っておちんぽ欲しい欲しいアピールしてもらうのが大好きなんだ♡　君は勿論やってくれるよね？♡』

『う……っ、は、はいっ、やります……！♡　チェイン・皇っ！♡　喜んでおちんぽ欲しい欲しいアピールをさせていただきましゅぅうううううう……っ！♡』

フンフン鼻息を荒くしながらそう叫ぶと、チェインは本当に言われた通り、というよりそれ以上のパフォーマンスをし始めた。

女性らしい曲線のある足は下品なガニ股になり、処女の女性器は、くっぱっ♡くっぱっ♡と、妙に機敏な動きで開かれたり閉じられたりを繰り返す。

『お・ま・ん・こっ♪♡　まんこっ♪♡　犯してくださいスティーブンさぁ～ん……っ！♪♡　ここですっ、チェインの内緒の穴ぁ……っ♪♡　オナニーばっかりしてきた未使用の穴っ♪♡　おまんこ♪♡　まんこ♪♡　まんこっこ、でぇ～～～～～すっ♪♡　はいぱかっ♪♡　ぱっか～ん♪♡　惜しげもなくオープンしちゃいますだっておまんこして欲しいからっ♪♡　スティーブンさんのおちんちん♪♡　ここにハメハメして欲しいからぁ……っ♪♡　パコパコプリィ～ズ♪♡　もうなんでもいいのっ♪♡　恥さらしだろうがなんだろうが……っ♪♡　あなたに犯してもらえるのならっ♪♡　どんなことでも……っ！♪♡　プリィーズ、プリィイーズ、ファックミー！♪♡　おちんちんを入れてくださぁ～いっ♪♡　ねっ♪♡　ほらこんなに媚びてますぅ♪♡　あなたに全力ラブコールっ♪♡　ぱかっ♪♡　ぱか♪♡　まだ処女なのにこんなっ♪♡　陰毛、いえ、マン毛を綺麗に掻き分けて……♪♡　あなたにチェインのエッチなところがよく見えるように……っ♪♡　わけわけしてぇっ♪♡　ぱかっ♪♡　どうぞ♪♡　おちんちん入れてください♪♡　チェインの初めての穴におちんぽ突っ込んで射精してくださいぃいいいいい……っ♪♡　くぱまんっ♪♡　くぱまんファックしてえぇえええええええ……っ！♪♡』

『あっはっは♡　こりゃあいい♡　チェインのおまんこは

面白いし、ザップのまんこが気持ちいいしねぇ……っ！♡』
『んおっ♡　お、お、ちんぽぉお……っ！♡　でっかいのが奥ま、でっ♡　んぅ、んんっ！♡』
チェインの必死のお誘いを愉快そうに眺めながら、スティーブンが腰を振る。
すぱん！♡ぱんっ！♡と鋭いピストンで何度も突かれて、ザップはまた勃起し始めていた。
『あーーーーー……♡　出る、出そう♡　チェイン、こっち来てくれるかい？♡　おまんこ舐めたげるよ♡　おっきくくぱぁしてこっち来て？♡』
『あ、あ♡　ぜひ、ぜひお願いします……っ！♡　んあああああああああああああああああああーーーーーー～～～～……っ♡　スティーブンさんにクリトリス♡　舐められ……っ！♡　膣、も……っ！♡　あぁあ♡　あぁあああああ……っ！♡　しあわ、せ……っ！♡　イっきゅぅううんっ♡』
『んん……、美味し♡』
『ひえぁっ♡　ちんっ、ちんぽ汁来たぁっ！♡　イくイくイくぅうううううううううううううーーーーーーーーー～～～……っ！♡』
チェインが大きく開け広げた女性器へディープキスをしながら、スティーブンが射精する。
胎の中に欲望をぶちまけられ、つられてザップまでぴるぴると快楽を極めていた。
『ああ……っ♡　スティーブンさん……♡』
『悪くないよ、君のまんこの味♡　チェインのおまんこなかなか美味しいよ♡』
『も、なんなんだよぉ、これぇ……っ♡』
ザップがふえぇん、と泣き出すのをよそに、スティーブンは吐精をやめないし、なんならチェインの秘部にちゅぱちゅぱ吸いついたままだ。
ようやく唇を離したと思ったら、またとんでもないことを口にしていた。
『それじゃあ、しっかり頑張ってくれたから、おまんこしてあげようかチェイン♡　ザップにもたくさん出したしね♡　ちょっとぐらい、分けてあげる♡　ザップのケツまんこ犯した生ちんぽでも良ければ、だけど♡』
『あ、あ、ほんとに……っ!?♡　あの、嬉しいです、嬉しいです……っ！♡　銀猿のお尻の穴に入れたあとだとか、全然……っ！♡　全然いいですっ！♡　よろしくおねがいしますっ！♡』
『でも本当にいいの……？♡　処女なのに？♡』
『いいんです……っ！♡　わ、私の処女膜なんて……っ！♡　ティッシュだと思ってくださいっ、ティッシュ！♡　どぴゅどぴゅ♡って精液出してくしゃくしゃにして捨てるだけのや

っすいゴミです……っ！♡　使い捨てでいいんですっ！♡』
『そう？♡　悪いね、じゃ早速……♡』
『……んぁおおおおぉおおおおおおおおおおおおーーー

雄の子種を欲してしまっているのか。理由は判然としなかったが、事実としてチェインは苦しそうななかにも、とろりと媚びた表情を浮かべていた。

『お♡　可愛いね、やっぱり女の子は笑ってるのがいいね♡にこー♡ってしてくれるかい？♡　処女バイバイ記念の大事な中出し♡　ハッピーなお顔でお迎えしよ♡　今日から中古品おまんこ嬉ピー♡ってスマイルでアクメして♡』

『あひ……♡　はひゃぁ、ぁ、あ！♡　きょっ、今日から中古品おまんこ、でっ♡　おまんこぉおおおおおっ、嬉ピぃいいいいいいいいいいーーー

スティーブンは器用に、膣穴をペニスで犯しつつアナルを親指でぐぽぐぽとほじくり回す。
『ぁ……、すご、えっち、だ……♡』
そんな二人に近づいてきたのは、まだ絶頂の余韻に頬を染めているザップだった。
『ん？♡　どうしたザップ、羨ましいか？♡』
『ふぁひ……♡　だって、おまんこも、お尻も、両方だなんて……♡』
『ふふ♡　じゃ、お前も同じことしてやるよ♡』
『⁉♡』
狙い通り！♡という顔をしたスティーブンははだけたシャツの胸ポケットから怪しげなスプレーを取り出すと、ザップにプシュ！と噴霧してみせる。
『うぁっ！♡　……っと、なにす……！♡　ん、ん、んんんんんんんんんんんんーーーーーーーーー～～～～……っ！♡』
どくん！♡どくん！♡と鼓動が耳元で鳴るような錯覚とともに、ザップは思わずシーツに倒れ込んでいた。
『あっあっあっあっスティーブンさぁんっ！♡　おまんこイくくっ！♡　お尻ほじほじキメられながらザコいおまんこイきまひゅうぅぅぅぅぅうーーーーーーーーーー～～～～……っ！♡』
『うんうん♡　アクメボイスもばっちりだねチェイン♡　恥知らずな淫乱処女には無責任な子種注いであげようなっ♡　認知はしませーんっ！♡　処女まんこ中古落ちさせただけの無意味な行為で種付けしますっ♡　どぴゅどぴゅどぴゅ～～～～～～～～～っ♡　純情まんこに生中出しっ♡　どぴゅどぴゅどぴゅ～っ、ぐりぐりまぜまぜ～っ！♡』
『あ……っ♡　ウソ、俺のカラダ、おかしい……っ！♡　いや、いや、いやぁあああああああああああああ……ッ！♡』
鬼畜かと突っ込みたくなるみたいな嘲笑を聞きつつ、ザップは身体の激変に直面させられていた。
男性器はみるみる縮み、逆にあちこちの部位がやたら丸みを帯びていく。
特に乳房は痛みさえ伴って物凄いスピードで膨らんでいき、見る間に豊かな、チェインのそれに匹敵するほどの爆乳ができあがっていた。
『はは……♡　ザップ、こっち向いてごらん♡』
『んぅ……っ！♡』
チェインから無造作にペニスを抜いたスティーブンがザップを引き寄せると、そこにはまさに、極上の美女が完成していた。
『スティーブン、さぁん……っ！♡』
まっすぐな、きらきら輝くシルバーのロングヘアが褐色の肢

体を滑らかに彩る。
　重力を無視してつんと尖るような張りのあるバストの頂には薄ピンクの乳首が愛らしく咲いて、こちらも銀にきらめく陰毛が、煽情的なラインを描く太ももの奥に見えている。
　シーツに膝立ちになっているザップは、女神と見紛うほどの美貌でその瞳を潤ませていた。
　は♡は♡と息は荒く、閉じた淫裂から、濃い色をした愛液がつぅぅーーー……♡と滴り落ちていく。
『お、お、俺、どうなっちゃったの……♡　お、おっぱい、おっぱいがある……っ♡』
『うん、ザップのおっぱいおっきいね……♡　女の子になっちゃったんだね♡　それも、おまんこあちあちで、おちんぽ欲しくって、マン汁だらっだらの……♡　食べごろ雌わんちゃんになっちゃったんだ♡　だから美味しく頂くね♡』
『そ、そんなぁ……っ！♡』
　いくらHLだからってそんなスプレーひとふりで、と思いはするのに、むずむずと女性器が疼いてしょうがない。

奥付

「たかがキス、されどキス。」

【発行日】　２０２２年０１月２９日
【発行者】　みたいわ南国
【発行】　南国飯処（み）
【印刷】　株式会社ポプルス
【連絡先】　mitaiwanangoku@gmail.com
【pixiv】　http://pixiv.me/mitaiwanangoku
【twitter】　http://twitter.com/MitaiwaNangoku
【BOOTH】　https://kakkomi.booth.pm/

表紙イラストはまぜ玉さま（@Mzoo397）に
お願いをさせて頂きました！
有難うございました！

◆ネットオークション、フリマアプリ等での転売はご遠慮ください◆

◆この本には以下の内容が含まれています◆

淫語/♡喘ぎ（受けも攻めも）/羞恥プレイ/言葉責め/攻めのフェラチオ/セルフ顔射/スパンキング/動画撮影/アニリングス/精液排泄/公開セックス/尻振り/まんぐり返し/自慰/お掃除フェラ/ぶっかけ/まんぺ/ザーメン提灯/犬プレイ/結腸責め/床オナ/潮吹き/野外露出/くぱぁ/ご主人様呼び/コスプレ（犬・メイド）/尿道プジー/ハート目/失禁/

◇あくまで妄想ですが
別カップリングの具体的な描写があります◇

☆レオナルド＆ツェッド×ザップ

性的に揶揄/非同意性交/奇形ペニス/4P/精液排泄/動画撮影/ダブルピース/

☆不特定多数のモブ男女×ザップ

性的に揶揄/動画撮影/聖水プレイ/陰茎回し/自慰/公開セックス/おねだり/尿道責め/キス/スティーブン合意で寝取り描写/中出し/輪姦/イラマチオ/5P/二輪挿し/コスプレ（アイドル女装）/おねだりダンス/陰茎でビンタ/顔面で自慰/ぶっかけ/女性優位の描写/顔面に放尿/

☆不特定多数のモブ男女×不特定多数のモブ男女・幼い子供

乱交/セクハラ/

☆チェイン×ザップ、ザップ×チェイン

性的に揶揄/罵倒/顔面騎乗/3P/モブと乱交/陰部隠せつけ/ザップ様呼び/フェラチオ/タマ舐め/69/クンニリングス実況/お便器プレイ/顔面に放尿/

☆スティーブン×チェイン

セクハラ/胸揉み/性的に揶揄/3P/おねだり/胸をスパンキング/コスプレ（エロ花嫁/新郎）/ライブラメンバーの前で公開セックス/キス/くぱぁしながら歌って性交乞い/クンニリングス/種付けプレス/雑にセックス/破瓜/中出し/尻穴くぱぁ/無責任に孕ませ/アナルセックス/出産妄想/身体に落書き/性奴隷化/M字開脚/下着をしゃぶる・かぶる/

☆スティーブン×チェイン＆爆乳女体化ザップ＆モブ女性

3P/交互に挿入/おまんこサンドイッチ/種付けプレス/不貞/性的に揶揄/膣破裂/アナル舐め奉仕/寝取られ描写/孕ませ/尻揉み/二人同時にフェラチオ・タマ舐め・パイズリ/イラマチオ/くぱぁ/二人で尻振り/協力して自慰/ご主人様・旦那様呼び/異物で自慰（万年筆・靴）/公開お便器プレイ/膣内放尿/

☆不特定多数のモブ男性×チェイン＆爆乳女体化ザップ

セクハラ/性接待/異物挿入（クッキー・花）/動画撮影/顔に排泄（飲み物）/アヘ顔ダブルピース/輪姦/中出し/まんぐり返し/暴力（ゴミ箱をかぶせる・乳首や性器を灰皿にする・出産した子供にぶっかけ）/アナルセックス/出産妄想/出産動画撮影/膣内放尿逆噴射/裸踊り/野外露出/

☆チェイン×爆乳女体化ザップ

百合/キス/69/中出しザーメンを飲み合う/貝合わせ/